クウのぼうけん

ゆらぎびと

クウのぼうけん

第1章 好きとはなにか　6
第2章 稼ぐとはなにか　16
・自分の直感を信じる　17
・意味がないといけないのか　24
第3章 性格とはなにか　28
・家族と自分　31
・性格は直すべきか　34
・このままでいい　35
第4章 人生とはなにか　43
・うまくいかない仕事　45
・占い師、ダーヨ　46
・主人公感を取り戻す　51
第5章 仕事とはなにか　56
・新たなる疑問　59
・何のために仕事をするのか　63
・生きるのに必要な5大要素
・目標設定の方法
・どうすれば稼げるのか
第6章 不安とはなにか

・不安でしょうがない　63
第7章 許しとはなにか　74
・できない現状　77
・反抗しないと舐められる　79
・自分を責めてはいけない　88
第8章 子どもとはなにか
・コップからこぼれる感情　91
・子育ての正解　100
第9章 許せないとはなにか
・チェケラの苦悩　103
・ふるさと　106
・思い出　111
・さよなら　116
第10章 会話とはなにか
・特別授業　121
・話す、そして聞く　124
・自分と相手、半分半分　129
・相手と同じくらい自分も大事

第1章　好きとはなにか

ここはタール村。ごく平凡な村であり、少しの畑と、あとの男たちは街へ出稼ぎに出て、生計を立てていた。

近くには川が流れ、田舎も段々と都会化している中では、自然が多い村であった。そこに、ある男がいた。名前をクウという。心優しい青年で、誰からも人気があった。

クウは争いを好まない人間で、人の悪口も言わない男であった。少し優しすぎるくらいであった。クウは、皮製品を売る仕事をしていた。皮というのは汎用性が高い材料で、皮をなめして鎧にしたり、手を守る小手にしたり、普段使いでも財布にしたりと、色々な用途に使えた。

そんな色々な用途に用いられる皮製品であれば、色々な人の役に立てるのではないか、そう思って、青年クウはその仕事を選んだのである。

皮製品を作る職人がいる場所は、タール村から少し離れたコンコルド街というところにあった。コンコルド街の、「チョウリ」という場所が、クウの職場であった。

クウは歩いてその街まで行って、皮製品を受け取り、各村にその製品を売る仕事をしていた。しかし働き始めてしばらく経って、クウは段々とその仕事に意味を見出せなくなってしまっていた。

まず皮製品を売る場所は、クウが働いているチョウリ以外にもいくつもあった。すでに職人の技術はあまり差がつかなくなっており、なかなか他のところと差別化がつかなくなってきていた。

そんな中、チョウリで作った皮製品をちゃんと売ることは至難の技であった。それに皮製品はすでに流通し、若干飽和状態にあったため、あまりお客さんもその皮製品を重要視している感触がなく、どうしても値段が安くないと売れないという事態に陥っていたのであった。
元々クウは皮製品であれば、いろんな人に喜んでもらえるのではないかという思いで始めていたので、それがなかなか満たされず、悶々としていたのであった。

そんな時、コンコルド街を離れ、近くの村まで皮製品を売る途中、小さな川があったので、川辺に腰を下ろし、少し休むことにした。

クウが住んでいるタール村にも、川が流れており、同じような川を見ると、早く家に帰って休みたい。そんなふうに思うのであった。

この仕事を辞めようか。

そんな思いに駆られたのも一度や二度ではなかった。いったい全体、ここからどうやっていけばいいのか。

そうしてふと横を見ると、クウと同じように、川辺に腰を下ろしている男の人がいた。クウより少し上の世代で、あまりこの辺りでは見ない顔であった。髭を蓄え、優しい目をしているのが印象的であった。

「綺麗な川ですね」

その男性はそう言った。

「そうですね」

クウも答えた。

「差し出がましい話かも知れませんが、元気がないようにお見受けします」

その男性は優しい目でそうクウに話しかけた。

「はは、そうですか、お恥ずかしい。いえ、仕事がうまく行ってなくてですね。こう言って、道草を食っているわけです」

クウは正直にそう言った。クウは心優しい青年であったが、あまり自分の話はしない人間であった。自分の話をすると少し愚痴っぽくなってしまう気がして、それで自分の話は極力しないようにしていた。

しかしこの男性には自分を打ち明けても、それを受け止めてくれそうな雰囲気があった。

「僕はケーと言います。学校で教師をしているんです。今日は久しぶりのお休みだったので、こうして好きな自然と遊んでいるわけです」

ケーと名乗ったその男性はそう話した。

「最近、子どもたちも元気がありません。なんだか目がうつろと言いますか。夢を失っている気がするんです。僕はそんな子どもたちを見ていると、どうにかしてあげたいと思うんです。もっと世の中楽しいもんだ。だからそんな目をしないで、と」

ケーは悲哀を感じる顔でそういった。

「そうなんですね、、、あ、あと、ぼくはクウと言います。皮でできた製品を売る仕事をしています。今は休憩していたところです」

クウも名乗った。そして珍しく自分のことを話し出した。

「いきなり会った人にこんな話をするのもおかしな話ですが、、、ぼくも最近なんだか元気がないんです。好きで始めた仕事だったはずなのに、なんだかうまくいかなくて・・・。自信も持てないんです」

クウはそう言うと、少し泣き出しそうになってしまった。自分が情けなく、ダメな人間に思えてきてしまった。

ケーはクウに質問した。

「今のお仕事はどういうきっかけで始められたんですか？」

「もともと人の役に立つ仕事がしたくて始めたんです。皮って色々な用途で使えるので、たくさんの人に喜んでもらえるかなって。でも現実はそんなに甘くなくて、安くないと売れないし、皮製品なんて当たり前すぎてお客さんもあんまり喜んでくれなくて。ぼくのやり方がまずいのかも知れないんですけどね」

「なるほど・・・。」

ケーは真剣な目でクウの話を聞いてくれた。

「なかなか思い通りにはいかないものですよね。僕も子どもたちに必死になって思いを届けようとしますが、なかなか伝わりません。ちなみに・・・」

ケーはもう一度クウのことを見て、言った。

「クウさんの好きなことってなんですか？」

「えっ」

クウは少し面食らってしまった。好きなこと？

「クウさんは先ほど『人の役に立ちたくて』、今の仕事を始められたとおっしゃっていました。それは仕事を始めた「動機」だと思います。それは素晴らしい動機であると思います。しかしそこから離れて、好きなこと、子供の頃好きだったこととか、趣味で続けていることとか、何かありますか」

そう聞かれて、返答に困ってしまった。なぜならそう言ったものが一つも見当たらなかったからだ。

もちろんタール村の図書館にある本を読むことは好きだし、コンコルド街に唯一ある劇場にたまに足を運んで楽しむことはある。しかし「これが好きだ！」と言えるものが何一つないことに気づいた。

返答ができていないと、ケーは困った顔をして言った。

「スミマセン、なんだか詰問するみたいな感じになっちゃって。これは僕が生徒たちによく聞くことなんです。君の好きなことはなんなんですかってね。今の生徒たちは変に優秀というか、非の打ち所がない応対をする子が多いんです。しっかりと勉強して大きな街に行って、そこで王様の役に立つような人になるとか、はたまたお金持ちになるんだとかね。でもそれは「なりたい」自分であって、もっと根源的なところで、自分は何が好きなのかと言うことをもっと深堀りした方がいいと思うんです」

ケーは真剣な眼差しでそう言った。

「何が好きか・・・ですか。正直あまり考えたことはなかったですね。いわゆる"趣味"みたいなものなんですかね。」

趣味は道楽ではないけれども、正直役に立たないもの、お金を生み出さないものと思ってきた。好きかどうかと言うよりも、お金が稼げるかの方が非常に重要だと思ってきた。

「ぼくは、好きなことと聞かれて、お恥ずかしながら、はっきりとこれだ！と言えるものがありません」

クウはしょんぼりした顔でそう答えた。それにケーはニカっと笑って答えた。

「大丈夫ですよ。実は好きなことを見つけるコツがあります」

「えっ、そうなんですか？それってなんなんです？」

いつの間にか、クウは身を乗り出していた。

「自分を信じることです」

「自分を信じる？」

これまた抽象的な答えだなとクウは思った。

「スミマセン、ちょっと抽象的すぎましたね。詳しく言うと、自分を信じて、なんでもいいから面白そうだな、楽しそうだなと思ったことをやってみることです」

「なんでもいいからやってみる・・・ですか」

クウは考えた。

「そう言った意味だと、今ぼくは川辺にふらっとやってきましたが、意識してみると、こういった川とか自然が好きなのかも知れません。実はぼくが住んでいる村にも川がありましてね。うーん、そう言った意味だと家が好きということなのかなぁ」

「ふふ、そうですね。自然を好むのは人間の一般的な嗜好としてあると思います。その調子です！」

ケーは満面の笑みでそう答えた。気づけばけっこうな時間が過ぎていた。

「ケーさん、ありがとうございました。色々と参考になる話が聞けてよかったです。でもぼくはそろそろ仕事に戻らないと」

「クウさん、ありがとうございました。クウさんとお話しできてとても楽しかったです」

二人は自然と握手をした。

「またもし良かったらお会いしましょう」

「ええ、またこの川辺で」

そう言って、二人は分かれた。

第2章　稼ぐとはなにか

・自分の直感を信じる

クウはケーに言われたように、自分の好きなもの探しを始めてみた。

ケーは、まず自分の直感を信じ、やりたいと思ったことは、理由がなくてもいいからやらせてみることが重要ということを言っていた。

クウはまず自分が自然に多く惹かれていることを、客観的に発見した。

クウはタール村の自然が好きだったし、何より水や川を好んだ。なぜかゆらいでいる川の流れを見ると、心が落ち着くのであった。

そしていつしかその様子を絵に描くようになった。子どもの頃、絵を描くのが好きであったことを思い出した。今思えば、なぜあんなに夢中になっていたのに忘れてしまっていたんだろう。絵を描くことは楽しかった。正直全然上手な絵ではなかったが、それで良かった。それに下手でもそれが徐々に上手になっていくことが感じられ、自分的には満足していた。

しかし、ここで疑問が頭をよぎった。その疑問を解消するため、またクウはケーに会うことにした。

・意味がないといけないのか

「こんにちは」

やはりまた会えた。前にケーと会った川の近くに来てみたら、川辺に腰をかけたケーの姿があった。

今日はクウも仕事が休みで、前回ケーと会った場所に来てみたのだ。特段約束はしていなかったのだが、なんとなく今日そこにケーがいるような気がして、やってきたらやはりいたのだ。

「やあ、きみは、クウくんだったね、こんにちは」

ケーは非常に優しく、親しみやすい笑顔を携えて、クウに挨拶を返した。

「またお会いできて良かったです。実は少し相談したいことがあって・・・」

「相談したいこと?どうしたんですか」

ケーは眉をひそめ、心配そうな顔をして、クウの顔を覗き込んだ。

「実は先日アドバイスをもらった好きなもの探しで、なんとなく好きなことは見つかったのですが・・・」

「本当ですか！？それはおめでとうございます！ちなみに好きなことはなんだったのですか」

「自然を感じたり、絵を描くことが好きだったんです。絵は子どもの頃描いてたのですが、自分でも不思議なくらいすっかり忘れていて。」

「そうですか」

ケーはグッと親指を立てて、グッドサインを出してくれた。それも満面の笑顔つきで。

「ただ絵を描いているときにふと頭をよぎったんです。**これって意味があるのかなって**」

「意味ですか？」

「そうです、意味。結局絵を描くことは楽しいけど、それでお金が一銭でも入ってくるわけではないんです。逆に絵の具や紙を買わなければいけないのですから、お金的にはマイナスです。それに時間も使ってしまう。こんなことをしているより、自分の本業である皮製品の勉強でもした方がいいんじゃないかと思うのです」

クウは顔を曇らせながらそう言った。そうなのだ、絵を描くのは楽しい。それは事実だ。しかしそればっかりやっていても腹は膨れない。クウには奥さんと、子ども二人がいた。彼らを養わないといけない。そんな中遊んでいる暇はないのである。

「なるほど・・・要はそんな好きなことばっかりしてないで、仕事をした方がいいんじゃないかって、ことですかね」

「まぁ、そんなところです・・・」

「なるほどなるほど、僕はクウ君の気持ちがよくわかります。僕も昔はそう思っていました」

「えっ、そうなんですか」

クウは素直に驚いた。そして「昔は」と言っているため、今はもう解決しているかの口ぶりであることも。

「何か解決方法を編み出したんですか？」

クウは気になって、ケーに聞いてみた。

「僕が好きなことはキャンプなんですがね。キャンプというのは村にある家から離れ、一人で山に籠り、何日かたった一人で過ごすんです。テントを張って一人きり。食べ物も自分で調達する。まあ結構ワイルドな方かもしれない。で、僕も聞かれたんですよね、妻に。そんなことやって何か意味があるのと」

ぼくと同じ意見だ。クウは思った。

「その時僕はこう答えたんです。全く意味はない。僕が好きだからやっているんだって。あの時の妻の呆れ顔はいま見ても笑えますね」

そう言って、ケーは実に面白いと言った様子でケラケラと笑った。

「意味はない。意味はなくていいですか？」

「ええ、**好きなことに意味なんてなくていいんです**。そもそも意味なんて、人間が生きるためにプラスかマイナスかの基準で定義した物差しみたいなものです。しかし好きはそれを超越しています。好きなものは好き。それでいいじゃないですか」

確かにそう言われたらそうかもしれない。でもどうしてもクウは納得ができなかった。

「でも、ケーさん。好きなことばかりしてられないですよね。ケーさんも奥さんを養わないといけないし、キャンプばっかりしてられないですよね」

「もちろんです。仕事をして、お金を稼がないといけません。しかしそればっかりの人生でいいんでしょうか？僕は前も言ったかもしれませんが、学校で教師をしています。そこで僕は子どもたちに、好きなことはするな、お金が稼げる仕事だけをしなさいとは教えていません。できる限り自分の好きなことをしてそれを研究しなさいと教えています」

「確かに、子どもの頃は時間があるからいいでしょう。しかし大人になっても好きなことをするというのは・・・」

どうしても頭が拒否して仕方がなかった。それだけ好きなことをするというのは、クウとしては抵抗があった。

「いきなり人間の頭は切り替えられるものではないと思います。クウ君は、まず自分の好きなものを見つけた。まだ芽のようなものかもしれませんが、それを大事にしたらいいと思いますよ」
そう言ってケーは腰を上げて、お尻をパンパンとはたき、土を払った。
そして小石を取り上げて、川に向かって投げた。石は何回かバウンドして、最後は川の中に消えた。

「何かはやってみないとわからない。今僕は石を投げたけど、三回バウンドした。」
そう言って、ケーはもう一度石を投げた。今度は一回しか跳ねなかった。

「次は一回だったね。次はどうかな」

三回目。石はなんと六回も跳ねた。

「六回跳ねた！すごい」

「ははは、たまたまですよ。こういうふうに、何かはやってみないと、その結果はわからないものです。当たり前ですがね。好きなことも、やってみないとどうなるかわからない。」

クウははっとした。やってみないとわからない。それはそうだ。一回バウンドするか、二回バウンドするか、それとも六回バウンドするか、石は投げてみないとわからないように、ぼくが好きなこの絵も描いてみないとわからない。

描いていたら、何か起きるかもしれない。

「継続・・・なんですかね」

ケーは驚いた顔をして言った。

「そう、それがすごく重要なことなんです。それがすぐわかるなんて、クウ君はさすがですね」

「い、いや、それほどでも・・・。でもなんだかお話できて良かったです。ただ頭が少し疲れました」

「ええ、こういう話は頭を疲れさせます。なぜなら今までの常識が崩壊していくような感じですからね。でも今日はいい話ができたと思いますよ。また会いましょう」

そしてケーは颯爽と帰っていった。

一人取り残されたクウはボーと川の流れを見ていた。時折鳥たちが来て、その鳴き声が聞こえる。

やり・・・続けてみるか。

そう、クウは心の中でつぶやいた。

第3章　性格とはなにか

・家族と自分

どこかで獣が鳴く声がする。

もう周りは真っ暗で、クウたちを照らすのは、目の前にある焚き火だけであった。クウはその火を眺めながら思った。火は心地いい。暖かいし、見ているだけで落ち着く。

「火を見ていると、落ち着きますよね」

そう、ケーは言った。そしてクウははっと我に帰った。そうだ、自分たちは、キャンプに来たのであったと。

そう、クウとケーはキャンプに来ていた。キャンプが趣味だというケーの誘いで、二人で少し遠くの山までキャンプに来ていたのであったと。

寒くなってきた時期にキャンプに行くと、山はもっと寒い。都会でいう極寒くらいの寒さがそこにはある。到着するのがかなり夕方近くになってしまったので、急いでテントを立て、軽く食事を済ませ、今は焚き火に当たっているというわけだ。

今ごろ、家族は何をしているかな・・・。

そう思うと、クウの心は少し痛んだ。今日は友達と二人でキャンプに行くということで、子ども二人を妻に任せ、一泊二日でキャンプに来たのであった。

子どもを置いて、一人で旅行をしに行くということで、だいぶ妻からの反対にもあった。自分に子どもを押し付けて遊ぶとは何事か、と。おっしゃる通りだとは思ったが、今度は自分が子どもたちを見るという条件付きで、特別に"お許し"をもらい、このキャンプに来たという経緯だった。
それを見透かしたかのように、ケーは言った。

「家族のことが心配ですか」

「ええ、心配というか、なんだか悪いことをしてしまったなという罪悪感ですかね。別に悪いことをしているわけではないのですが、やっぱり子どもたちの面倒を、一人に押し付けてしまった気がして、そこに罪悪感を感じているのかもしれません」

クウはそう言うと、少しため息をついた。せっかくお許しをもらって、キャンプに来たのに、こんな暗い気持ちになってどうする、とも思った。

「僕には子どもが三人いるんですがね」

「えっ、そうなんですね。ぼくは前にお伝えしたかもしれませんが、二人子どもがいます」

「二人もいいですね。僕のところは三人とも男で、そりゃあもう元気のなんのって。今日も育ち盛りの男の子三人を妻に見てもらっているので、申し訳ないなと言う気持ちがあります。まあ妻のお母さんも見に来てくれていますがね」

「そうですか・・・」

そう、クウやケーのように夫婦ともに働いていて、子どもを育てるとなると、どちらかが育児から離れた際、もう片方がそれを行わなければならなくなる。一時的に負荷は高まるのだ。そしてクウは言った。

「でも、ぼくは子どもたちのことは本当に愛しているんです。もちろん奥さんのことも。でもなんだろうなぁ。やっぱりしばらくすると、自分の好きなことをしてみたくなってしまうというか。今日

だって、やぱりキャンプに行きたいと思ったから来ているわけだし。これはぼくのわがままなんですかね」

ケーはしばらく間を置いてから答えた。

「・・・いえ、決してわがままなんかじゃないと思いますよ。人によっては周りの人と24時間365日一緒にいても大丈夫という人もいるでしょう。しかし僕も、絶対的に一人の時間が大事なのです。その理由はまだよくわかってないのですが、ある意味人と離れ、自分と向き合う時間が必要なのです」

そうなのだ。ずっと人の輪に入ってコミュニケーションを取れればいいのかもしれないが、自己調整するためというか、なぜか一人になって、気持ちを落ち着かせたり、好きなことをすることが必要なのだ。そういった意味で、クウはケーと似ているなと思った。

「もしかすると、知らず知らずのうちに、家族にさえも気を遣っているのかもしれません。こう言ったら嫌がるかな、とか、これはやってあげようとか」

「確かに。特にクウ君の場合は優しいから、家族にも気を遣ってしまっているのかもしれませんね。たまには一人で何も気にせず好きなことをする時間が必要なのかもしれませんね」

そう言って、ケーは目の前の焚き火に、薪を継ぎ足した。火の粉が跳ねる。そしてパチパチと言って、薪は燃え始めた。

・性格は直すべきか

「この性格は直した方がいいんですかね。この性格っていうのは、優しすぎる性格です。家族に気を使わないようにできれば、家族とずっと一緒にいても疲れない。それは家族というコミュニティにとって、最適な形だと思うんです」

クウは自分の考えをケーに打ち明けた。ケーは火を見ながら、いくばくか独り言のように言った。

「性格は・・・直さなくてもいいんじゃないでしょうか。僕もそのテーマについてはよく考えます。つまり性格を直すべきかどうかってね。そういえば僕の生徒に、いくら注意しても忘れ物をしてくる子どもがいました。明日の持ち物を忘れないように、メモに書いて忘れないようにしなさいとか、帰る時に一声かけて注意喚起をするとか。でもそれでも彼はほぼ毎日忘れ物をしてきました。少し強い言い方をしてもだめでした」

ケーは昔を思い出す時は、あまり嫌な顔をしない。そういう時は少し笑みを浮かべ、懐かしそうに話をする。その表情にクウは好感を持った。

「しかしと言ってはなんですが、彼は非常にユニークで、面白い子でした。アイディアも非常に奇抜で斬新なことを思いつくし、彼がおどければみんなが笑いました。その時思ったのです。性格を直すというのは非常に傲慢な行動なのではないかってね」

「非常に傲慢？先生が生徒に注意や指導するのは、当たり前なんじゃないですか」

「もちろん指導はしますよ。よくないと思ったことは注意もします。お説教もします。でもいいか悪いかわからないけど、僕は神様ではない。そして先生と生徒に上下関係はない。今は教える立場と、教わる立場という立場が違うだけで、どっちが偉いとか偉くないとかない。そういう気持ちが少しでもあると、生徒は気がつきます。真摯に向きあうことが必要なんです」

クウは、ケーのいうことはわかるが、それが性格を直すのと、どう関係してくるのだろうと、この後の展開が気になりながら聞いていた。

「すみません、少し話が横道に逸れましたね。つまり、人の性格はどうしても直せないこともある、ということなんです。いくら人が注意しても直らないものは直らないってね。でも実はこの話には後日談があるんです」

ケーは少しいたずらっ子っぽく笑った。

「実はその生徒はある女の子に恋をしたらしいのです。そしてその女の子が言ったそうです。私はまめな男性が好きだってね」

「そりゃ、またシブい回答ですね」

クウは思わず笑ってしまった。年端も行かない女の子の好きなタイプがまめな男の子とは。

「それを知ってから彼は変わりました。彼女に見合った男になるために、忘れ物はそこから一度もしなくなったのです。まめな男は忘れ物なんてしないってね。僕はここから学んだのですが、性格は直すのは難しいが、直る時もあるってね。それはどんなタイミングで訪れるかわかりません」

ケーが話したかった内容が、段々と、クウにもわかってきた。

つまり、性格は直すのは非常に難しく、直らないことが大半である。しかし何かの拍子にスッと変わることもある。それはタイミングによるものなので、予想ができないということなんだと思う。

「いいお話ですね。それに対するぼくの感想を話してもいいですか」

「どうぞ」

「ぼくの場合だったら、家族とずっと一緒にいれるようにしたいという気持ちがある反面、個人の時間も欲しいという思いがあり、この二つが葛藤しています。そのはざまにいるぼくは、正直ちょっとしんどいです。個人の時間をゼロにして、家族とずっと一緒にいれる人になれたらいいんだとも思います。つまりそういう性格に自分を直すということですね」

クウとケーは焚き火に対し、「字形に座っていた。クウから見ると、ケーは左に座していた。そのため、クウは左にいるケーを見ると、右頬に炎の暖かさを感じることができた。

・このままでいい

「でもなかなかそうはなれない自分もよく知っています。だから**ぼくはこのままでいいんじゃないか**と思えてきました」

「このままでいい？」

少し予想外の回答だったようで、ケーは驚いた様子だった。

「ええ、このままのぼくでいい。つまり、自分の個人の時間を確保したい。でも家族とも一緒にいたい。でも一人の時間が欲しいと思っている。そういう二つの要素を抱えつつ、それを解決できないのが今のぼくです。そういう悩んでいるぼくでいいと思ったんです」

そういうことか、と、合点がいった様子で、ケーがうなづいた。

「いい答えですね、クウ君。悩みを持ちながらも、それを解決できない自分を、そっくりそのまま受け止める。受容の精神ですね」

「はい。ケーさんの言っていた、忘れ物が直らなかったその生徒さん。もしかしたらケーさんの言っていたことをあまり聞いてなかっただけかもしれませんが、彼は自分が忘れ物をするからと言って、自分をダメな奴だとは思わなかったんではないでしょうか。あまり人から言われたことを気にしないのも、一種の性格だと思いますが、自己肯定というのは大事な要素だと思います」

「そうですね、良いとかダメだとかいうのもあくまで価値観の一つなので、絶対的なものではないですものね。いいとか悪いとかそう思っている自分を、そっくりそのままずは受け止める。うーん、今日も深い話になりましたねぇ」

そういうと、ケーは大きなあくびを一つした。目がトロンとしており、眠そうだ。

「そろそろ火を消して眠りましょうか。明日は明日の風が吹く。今日はこの大自然の中でゆっくりと眠りましょう」

そうケーは言った。ダメな自分を受け止める。できてない自分を受け止める。解決できない自分を受け止める。一歩はそこからだ。

第４章　人生とはなにか

・うまくいかない仕事

「はぁ・・・」

つい、クウはため息をついてしまった。それもそのはず。仕事が全然うまくいっていない。

クウは皮製品を売る仕事をしていた。コンコルド街という街の、「チョウリ」というのが彼の職場だ。そこで職人から皮製品を受け取り、それを近くの村に売りに行っていた。

今回の仕事はよくチョウリの皮製品を買ってくれるお得意様とのものだ。しかし超短納期で皮のブーツを１００足作って欲しいというオーダーであった。お得意様はその１００足のブーツを、お得意様のところにくるお客さんに渡したいというのであった。

さっそくそれをチョウリの職人に伝えると、職人はすぐにムッとした顔になった。１００足のブーツの注文はチョウリにとってはありがたいものだが、職人の数は決まっているので、職人の負荷が高まるだけだ。なんとか職人をなだめすかし、やっとタール村に帰ってきたところであった。お得意様と職人の間に挟まれ、クウはすっかり疲れてしまった。

それ以外にも、誰もやらない仕事を、代わりにクウがやったが、苦手な分野だったこともあり、ミスもしてしまった。そのミスのリカバリーもクウの仕事の負荷を高めた。一人で頑張り、それで精神的にもヘトヘトになってしまった。

そして休みになったその日、クウはケーに相談するため、またあの小川に向かったのであった。

・占い師、ダーヨ

しかし残念ながらいつもの小川にケーの姿はなかった。それはそうだ、別に会う約束をしているわけではないし、会える方が奇跡に近い。

そりゃ当然だよな・・・と思い、少し歩き、タール村に戻ってきた。そしてタール村の広場のベンチに腰をかけた。

ベンチは二つあり、クウが腰掛けたのは左のベンチだ。右のベンチには男が2人座っていた。

一人はクウよりも2回りくらい年齢が上で、ひょろっと細長そうな男性だ。少し神経質そうな顔をしており、ソワソワしている。その男性がもう一人の男に話しかけている。

「いいですか、この仕事は絶対さっき言ったようにした方がいいと思います。あとはあなた次第です」

その男性は一見ソワソワしていて落ち着きのなさそうな風体であったが、言葉は非常に熱がこもっていて、心強い印象だ。少し話をして、もう一人の男性は去っていき、そのソワソワしているが、声には熱がこもっていた男性が一人残った。

周りにはクウとその男性しかいない。クウは口を開いた。

「なにかお話をされていたようですね。どんな話をしていたのですか」

クウは思い切って聞いてみた。いつもはこんな立ち入るようなことはしないが、その時はなぜか聞いてしまった。仕事で疲れてやけっぱちになっていたのかもしれない。

男性も口を開いた。

「いえ、別に・・・仕事の話をしていただけです。僕がこういうことをしたら絶対あなたのためになるということを、説明していたのです」

その男性はそう説明した。そして自己紹介をし始めた。

「私の名前はダーヨといいます。占い師です」

「占い師？」

なんだか変な人に話しかけてしまったか・・・。即座にクウは後悔した。占い？なんのことだ。

「そうです、占い師です。私は人を見ると、その人の運気がわかり、その人の今までの人生、そしてこれからの人生が手にとるようにわかります」

ダーヨと名乗った男性の目は真剣であった。クウは思った。もしかしたら頭がおかしい人なのか。しかしちょっと興味もあった。

「占い師の方が、なぜ仕事の話をしていたのですか」

先ほど、ダーヨは仕事の話をしていたと言っていた。どうしてもクウは占いと仕事が結びつかなかった。

「詳しくは言えませんが、占いで見えた未来から、あの人の仕事へのアドバイスをしていたのです」

キッパリとダーヨは言った。なるほど、占いで仕事のアドバイスをしていたというわけか。

「それにしても、あなたは・・・だいぶ悩んでいるふうに見えます。あなたも仕事の悩みですね。本当に、最近は仕事の悩みを持つ人が多い」

「わかるんですか？」

驚いてクウは聞いた。もしかしたら元気がない雰囲気を察知して、ダーヨは言っただけかもしれないが、クウは純粋なので、ダーヨの言うことをそのまま受け止めた。

「ぼくはクウと言うのですが、仕事がうまく行っていなくて。好きで始めた仕事ではあるんですが、ものすごく得意なわけでもないから、日々頑張りすぎて疲れてしまうんです」

クウはため息をつきながらそう話した。

「ふうん。まあ、目を輝かせながら仕事をしている人の方が少ないと思いますけどね。まあいいでしょう。何かの縁ですから、ちょっと占ってあげましょう。私の目を見て、右手をこちらに差し出してください」

そういうと、泳ぎがちだった目を、じっとクウの方に向け、ダーヨは黙った。
クウは恐る恐る右手をダーヨに差し出した。そしてじっとダーヨの目を見た。
何分くらい経ったであろうか、もういいですよと言うダーヨの声でクウは我に帰った。

「うーん、そうですね。クウさん、あなたには決定的に足りていないものがあると思います」

「えっ、それってなんなんでしょう」

クウは思わず聞いてみた。ダーヨは無表情な顔で言った。

「ずばり、”主人公感”です」

「主人公感？」

聞いたことのないフレーズであった。主人公感？主人公である感じ？どういうことだろう。

「正直言って、あなたからは自分がこうしたい、こうするんだという強い気持ちが感じられません。なんとなく波風立たせず、平和に生きていきたいという雰囲気を感じます。この世はそんなに甘いものではありません。波風荒れ狂う大海です。そんな気持ちでは、周りの強い勢いにたちまち流されてしまいます」

ダーヨの言葉は歯に衣着せぬもので、痛烈であった。正直クウはカチンと来た。なぜ見ず知らずの怪しい占い師にこんなコテンパンに言われないといけないのかと。だが、ダーヨの言っていることに反論できない自分がいることを知っていた。

そうなのだ。クウには人を蹴倒してでもなにかやってやろうというそういったハングリー精神はなかった。どうしても人のことが気になって優しくしてしまう。だからなかなか自分の意見を突き通すのができなかった。

「確かに、ダーヨさんの言う通りです」

沈んだ気持ちでクウは言った。ダーヨは少し間を置いてから話した。

「ですが、それが全く悪いことだとは思いません。優しさは人生の上で重要です。しかし人のことに気を遣いすぎてしまうと、あなたの人生なのに、あなたが傍観者になってしまいます。やはり自分の人生ですから傍観ではなく、主役としてスポットライトを浴びたいのが、人情というものだと思います」

ダーヨはそう言い切った。ダーヨの言葉は辛辣なものも多いが、芯をついているというか、外見のソワソワ、ナヨナヨした感じとは真逆で、非常に言葉は強いものがあった。魂が乗っているというべきなのかどうか。

「さて、占いはここまでです。私はこう見えて、忙しいのでね」

そういうとそそくさと、ダーヨは帰ろうとした。そして最後に振り返って目を合わさずに言った。

「私ははっきりという性格なので、もし気分を害されたらすみません。ただこういう性格なので、取り繕うことができないのです。そのためか友達も全然いません。まあ友達なんで数人いれば、十分ですけどね。それでは」

そういうと、ダーヨは帰って行った。

そこからしばらくクウは広場のベンチに座って、ぼーと考えていた。

主人公感。占い師と名乗ったダーヨはそう言った。それがクウからは感じられないと。確かにクウは人のことばかり気を遣って、自分を隅に追いやる傾向がある。多分本当は目立ちたいのに恥ずかしがって、舞台の脇の幕にそっと避けてしまうのだ。

そうではなくて、自分を主役に、自分の人生を取り戻す。その必要性があるのかもしれない。そうクウは感じた。

そう考えていると、最初、ダーヨと話をしていた男性がベンチに戻ってきた。見ると、ベンチにハンカチが残っていた。どうやら忘れ物をしたようだった。

「あなた、さっきダーヨさんと話してました？」

忘れたハンカチをお尻のポケットに入れながら、その男性はクウに質問した。クウは話してました、と答えた。

「実はハンカチを忘れたのは結構前に気づいていたんですがね、あんまりあなたとダーヨさんが熱心に話していたので、なんだか水を差すような気がして、しばらく様子を伺っていたんです」

それは悪いことをした。クウはその男性に謝罪した。

「いえ、それはいいんですがね。それにしてもあなたラッキーでしたね」

「えっ、何がですか」

「ダーヨさんと話ができてですよ。あの人は今は占い師なんて名乗っていますが、昔はこの国の大臣として、この国の中枢にいた人なんです。斬新なアイディアでさまざまな国の問題を解決して、王からも信頼を寄せられていた人なんです。ちょっといろんなことがあって、今は引退して、なぜか占い師としていろんな人にアドバイスをしているんです」

そんなすごい人だったのか。素直にクウは驚いた。単なるおどおどしたおじさんではなかったのだ。確かに外見とは裏腹に、言葉には重みと説得力があった。

クウはその日は家に帰り、次の日の仕事の準備をすることにした。

・主人公感を取り戻す

次の日の日常から、クウは”主人公感”を意識するようにした。自分を中心におき、いろいろなことに立ち向かってみた。

納期が逼迫しながら職人とコミュニケーションを取り、皮のブーツ100足を用意する仕事は、別に自分は悪くないんだと自分に言い聞かせ、ゲームのようにお得意様と職人とコミュニケーションをしてみた。

するとおもしろいことに、あんなに辛くて楽しくないと思っていた仕事が楽しくなり、前向きに仕事に取り組めた。自分がミスをしてしまった仕事も、どうすればこれをクリアできるかというゲームだと思い取り組むと、解決できた時が快感で、楽しくなってしまった。

ダーヨの言っていた、主人公感を取り戻すというのは、こんなに重要なことだったのかとクウは痛感した。

それからダーヨのことは噂にしか聞かない。どうやら占いという名のアドバイスをいろいろな人にして、感謝されているようだ。評判も上々らしい。またどこかで会いたいとも思うが、もしかしたら会えないかもしれない。

でもそれでいい。人づてに噂は入ってくるし、元気そうなら尚よしだ。クウは大切なメッセージを受け取れたことを、ダーヨに感謝した。人生とは、自分が主役の舞台なのかもしれない。

第5章　仕事とはなにか

・新たなる疑問

「ふうん、そんなことがあったんですね」
ケーはクウから話を聞いて、そう言った。主人公感。確かにそれは自分の人生を主体的に進めていく上で、非常に参考になる話であった。

クウはケーと、いつもの小川の側に座っていた。朝の7時。ようやく日が出始め、あたりが明るくなってきた頃だった。

実はケーは、休日は子どもたちが朝寝ている間、この小川の側でぼ～とするのがルーティーンらしく、それを知ったクウは、そこに合わせるように訪れるようにしていた。

毎週やると、ケーも嫌がるかもしれないから、少し間をあけ、なにか話したいことがあれば、休日のこの朝の時間帯に訪れるようにしていた。

そして、ある休日の朝、クウはいつもの小川の側を訪れ、ケーと出会い、先日出会ったダーヨの話をしたところであった。

「有名なかたなんですね、あいにく僕は知りませんでしたが・・・。そういう人に会えるなんて、クウ君は運がいいですね」

本当にそうだ、とクウは思った。そんな高名な人に出会えて、アドバイスなんてもらえるなんて、ありがたい話である。それにそのアドバイスが非常に的を得ており、参考になった。クウはダーヨに非常に恩義を感じた。

しかしまたクウの頭の中には、新たな疑問が浮かび上がってきた。それは何のために仕事をするのか、ということだった。

・何のために仕事をするのか

今までクウは、なぜ仕事をするのかと言ったら、絶対的に「食っていくため」と思っていた。仕事をして働き、お金を得る。働かざる者食うべからずと、教わってきた。役に立って初めて、生きる資格があると思っていた。

だからぐうたらと働かず、頑張らなければ、一銭も入ってこないのは当然のことだし、働かず遊んでいる人を憎んでさえいた。クウ自身は非常に頑張って汗水流して働いているのに、何もせず酒を朝から食らっている人を見たら、ムカムカしていたであろう。クウは労働に対し、生きるためにするものという認識が強かった。

そのため、仕事は「やらなければいけないもの」という印象があった。嫌でも歯を食いしばってやり通さなければならない。それが責任というものだ。それが自分に割り振られた役割だ。それを果たせないのは自分の力量不足だ。誰かの迷惑になってはいけない。迷惑をかけてはいけない。ある意味呪縛のようなものがクウの頭の大半を占めていた。

そんなクウも、ケーやダーヨとの出会いの中で、徐々に変化しつつあった。
まず、好きなことを見つけた。クウの場合は絵を描くことだった。そしてそれを今も継続している。
なんだかんだ、ケーと出会って、1年ほどが過ぎようとしていた。

そしてできていない自分を受け入れ、最近のダーヨからのアドバイスによって、物事を主体的に取り組むようになってきた。非常に良い変化だと、クウは自分としても満足していた。

本当はずっと絵を描いていたい。でもそれは不可能であった。なぜなら絵を描くことで、一銭も稼げていないからだ。妻と子どもがいるクウにとって、それは致命的であった。絵を描くことは趣味。

仕事として皮製品を売って、お金を得る。その空いた時間の中で、趣味の絵を描くというのがクウの中の時間の使い方だ。

こうなってくると、本当は絵を描きたいのに、それを拒むような形で仕事の存在が邪魔をしてくる。大好きな時間を妨害する、邪魔者に見えてくるのだ。

クウはタール村から少し離れた、コンコルド街にある、皮製品を作る工場の、「チョウリ」というところで働いていた。そこで作られた皮製品を、近くの村に売りに行くのが仕事だ。

仕事は安定しており、そこで働く人もいい人たちばかりだ。クウは自分はなんて恵まれているんだろうと思っていた。

しかしその一方、絵を描くことに非常に心惹かれている自分がいることを知っていた。皮製品を売る仕事は素晴らしい仕事であると思っていた。人の役に立てる立派な仕事だと。しかしそれでもクウは自分の中で嘘をつけなかった。チョウリでの仕事より、絵を描くことが何倍も何十倍も楽しかったということを。

仕事をするのはお金を稼ぐためと割り切ってしまうと、チョウリでの仕事が非常に淡白なものに思えた。チョウリの中ではもっと自分たちの皮製品を一生懸命売ろうと、熱心に働いている人が多くいた。

そんな中、自分は二足のわらじを履いたように、本当は絵を描きたいと思っている。また、クウの妻も働いていたので、子どものことや家のことも半分半分で行っていた。そのため、なにか家の都合で仕事に穴を開けてしまうことも時折あった。

そういうことがあると、十分チョウリに対し貢献できていないことで、自分を責めることもあった。なんだか本当は好きな子がいるのに、違う女の子と付き合っているような気持ちだった。その付き合っている子にそもそも失礼だし、自分はどこかで踏ん切りをつけなければいけないと、常々クウは思っていた。しかし、職を変えるとなるとリスクも伴うし、子どもたちの将来を言い訳にして、何も行動に移せなかったのである。

「クウ君、何やら顔つきが険しいですよ」

そう、ケーに言われて、クウは苦笑いをした。

「すみません、また違うことで悩んでいまして。仕事のことなんですがね」

「どうぞ、話してください」

ケーは優しい笑みを浮かべ、クウの話を聞く体勢を作ってくれた。クウはありがたいという気持ちで心が満たされるのを感じつつ、話し始めた。

「仕事のことなんですがね、この後どうして行こうかと考えているんです。ぼくはありがたいことに、自分の好きなことを見つけることができました。世の中が変わったみたいに、今は楽しいです。でも苦しいことも増えました。それは仕事に多くの時間を使ってしまい、本当にしたい"好きなこと"ができないことです。仕事って何のためにやっているのかなって、元気がなくなっちゃうんです。もちろんお金を稼ぐためだと思っていますが、それだけだと、もう、モチベーションが維持できなくなっているんです」

「なるほど、本当はやりたいのに、それがやれてないことに対し、モチベーションが低下しているんですね」

ケーはコンパクトに要約してくれた。そう、クウは、本当はやりたいことができていないため、やる気が低下していたのだ。

「もしかすると、クウ君は、"生きるために必要な要素"の話をした方がいいかもしれないですね」

「生きるために必要な要素・・・ですか？」

生きるため、そのためにはお金があれば大丈夫なのではないのか。

ケーは二回軽く咳払いしてから、"生きるために必要な要素"の話をしてくれた。

・生きるのに必要な5大要素

「結論から先に言うと、生きるために必要な要素は五つあります」

「五つですか・・・」

予想より多かった。そう、クウは思った。

「僕がキャンプの師匠から教わった話です。かなりサバイバルチックな話です。まず何よりも生きる上で必要なもの。クウ君はなんだと思いますか」

サバイバルチックなものだろう。そうしたら水と食料か。クウは思った。

「水と、、、食料ですかね？」

「正解です。ただ、優先順位的にはもっと高いものがあります。実はそれは空気なんです」

「空気・・・！確かに」

当たり前すぎて気付かなかったが、言われてみれば当然である。人間、空気が無ければ窒息してしまう。ケーは話を続けた。

「空気が必要な要素として第一位で、実は次は水ではありません。体温なのです。急激な寒さ、暑さに人間は非常に脆いです。体温が調整できないと死に至ります」
確かに、そういった意味だと、あたたかい服、あたたかい家は非常に重要なものだと、クウは思った。
「その次、第三位が水です。第四位が火、第五位が食料です」
食料が一番最下位だったのが、クウにとっては意外であった。
「サバイバルでは「3の法則」と言ったりするのですが、

・空気がないと3分
・体温が維持できないと3時間
・水がないと3日
・食料がないと3週間

しか人間は持たないと言われています」

3の法則、覚えておこう。クウは頭の中に深く刻み込んだ。

「そして第四位の火ですが、これはちょっと特殊なものです。実は他の四つがあれば、生物としては生きてはいけるのですが、火がないと色々と不便ですよね。水を沸騰させて安全にしたり、料理を作ったり、暖を取ったりできないですからね。でも火は精神を落ち着かせる効果があるんです。焚き

火をして、ゆらめく火を見ていると、たった一人でも精神が落ち着いてきます。気が狂ってしまったりするのを抑える効果があると言われています」

確かに、一人で島に取り残され、水や食料があっても一人であれば、なんと孤独だろうか。それを癒してくれるのがゆらめく火なのであろう。

「そしてここからが僕の考えなのですが、火が持つ要素、つまり"ゆらぎ"が、人生にとって、いえ、人間が生きる上で、非常に重要な要素なのではないかってね」

ゆらぎ。揺らいでいるというと、あまりいいイメージをクウは思っていなかった。フラフラしていて、安定感がなく、いかにも頼りなげだ。そんなものよりも、もっとガッチリと固定化されている方が、安心感がある。

「ここから、クウ君の悩みである、モチベーションの話につながっていくと思うのですが、つまり、人間、生存できるだけの水と食料、衣服に住居が手に入ったら、正直"生物"としてはゴールに辿り着いてしまっていると思うんです。長年、生物の目標や夢は、安全なところで、お腹いっぱいご飯を食べることでした。今までは猛獣に怯え、食料の確保にも困っていました。病気にもなります。しかし今の僕たちの生活はどうでしょうか。仕事もあり食うに困っていない。戦があるわけでもない。医療も充実している。生物としては、天国のような世界に、僕らはいるんです」

確かに、ケーの言う通りだ、クウは思った。言われてみればぼくたちは何と幸福な世界にいるのだろう。外敵からの攻撃もなく、食うに困っていない。タール村には大きな病院はないが、近くのコンコルドまで行けば大きな病院がある。クウの場合は奥さんもいて、可愛い子どももいる。言われれば言われるほど、なんて自分は恵まれているのだと思う。その中で、仕事が嫌で、好きなことだけしたいと言っているようで、段々とクウは恥ずかしくなってきた。ケーは話を続けた。

「ゆらぎの話に戻しましょう。つまり、どういうことかと言うと、人間は生物としてのゴールに辿り着いてしまったが故に、自分たちで新しいゴールを作り出す必要が出てきたのです。それはやりがいとか天職とか使命とか、時と場合により、呼び方は変わります。ただ、そう言ったものの存在を新しく創造する必要性が出てきているんです」

こんな話を、ケーは子どもたちにもするのだろうかと思いながら、クウは話を聞いた。

「その目標はどういったものにすれば良いか。それは個人が決めて良いですし、決めるものです。その目標は自分で決めて良いので、変えても良いです。誰かが答えを持っているものではない。そもそも答えがないものなんです。そういう不確かもの、それがゆらぎです。そういった不確かなものが生きる上では必要なんです」

ケーは真剣だった。クウは今、ケーが話してくれたことを、まとめようとした。

「ケーさん、お話ありがとうございます。五つの生きる上での要素、大変参考になりました。そして火、ゆらぎの話ですね。ゆらゆらとゆらめいて、不確かなもの、流動的なもの。そう言ったものがないと、つまり安定した状態が長く続くと、人間はそれに耐えられないと言うことなんですかね。でもそれはわかります。ぼくの今の状態も、好きなことがあるのにそれができない状態がずっと続くと思うと嫌になります。人間は変わらないとじっとしていられない性分なのかもしれません。

そして、人類としての目標を、自分で設定しなければいけない時代。確かにそうだと思います。何か生きる上でのやりがいが見つからず、このままの生活が何十年も続くと思うと、人間は希望を見出せず、心を病んでしまうのだと思います。だから変化を起こさせるもの、それが目標の設定なんでしょうか」

ケーは満足そうに笑って答えた。

「クウ君、素晴らしく良くまとめてくれて、ありがとうございます。本当にクウ君の言うとおりで。本当にクウ君はまとめるのが上手だと思います。

そうです、目標というものがないと生活に張り合いが出ず、元気が出ません。そのために目標を定めることは非常に重要なんです」

ケーはここまで話すと、持ってきていた竹の水筒から、水をぐいっと飲み込んだ。

・目標設定の方法

「ですが、どうやって目標設定をすればいいんですかね。ケーさんはこれに対し、何かアドバイスはありますか」

そうですね・・・とケーは言ってから、少し考えてから言った。

「クウ君の目標というか、夢というのは、その、絵で食っていくとかそんな感じなのですかね」

「そうですね、それができたらハッピーだと思います。いわゆる好きなことで食っていくってことですね。ちなみに休みを使って、旅に出られたらと思います」

「なるほど。絵で食うことができて、ちょこちょこ旅にも行きたいって、そんな感じですね」言われてみると、何だかチンケな夢にも思えてきた。しかしクウはなるべく自分を否定しないように気をつけた。

「あ、あと、やっぱりぼくから見ると、みんな、やりたくない仕事を、嫌な顔をしてやっている大人が多い気がするんです。食べていくために仕方なくやっているんだってね。そういった世界ではなくて、もっと生き生きと、自分の好きなことで誰かの役に立って、幸せな人生を送る。そんな人で溢れる世界になって行けばいいなとも思っています」

クウは自分の夢を付け足した。

「なるほど、それはどちらかというと、自分が、というより、周りが、っていうものですね。ではまず最初の絵で食っていくっていう話。それはお金で言うと、どれくらい必要ですか」

「そうですね・・・、お金で言えば、一年で５００万リラあれば、十分だと思います」

「月で言うと、どれくらいでしょう」

「月だと４０万くらいだと思います」

「週で換算すると？」

「週だと、１０万くらいですね」

「では日だと？一日だとどれくらいしょう」

「一日だと、休む日二日間を抜くと、２万リラくらいです」

そう言ってから、クウは天を仰いだ。一日で2万リラ！どうやって稼げばいいか検討がつかなかった。例えば絵を一枚描いて、それを2万リラで売って、それを毎日続ける。しかし自分の絵が毎日売れるとは到底思えなかった。

「おそらく今、クウ君はそんなの無理だ、とかどうやってやればいいか検討がつかない、と思いましたね。もう無理だと思った瞬間、試合終了です。その夢は永久に叶いません。もうだめだ、できっこないと思った瞬間、夢は叶わない。そう肝に銘じてください。」

ケーは厳しく真剣な目でクウに言った。静かに、しかし力強く、クウは首を縦に振った。

「逆に一日に2万リラ、絵で稼ぐことができれば、クウ君の夢は達成です。目標設定をするときは、自分の大きな目標をまず数値化する。そしてそれを年単位から月単位、日単位と粒度を細かくしていく。そうすると、毎日何をすれば良いかが明確になり、夢の実現にグッと近づきます」

ケーは力強い笑顔で、そう答えた。

・どうすれば稼げるのか

「長くなりましたが、これで最後です。それはどうやって、一日に2万リラ、絵で稼ぐか、です。今、クウ君はその策が思い浮かんでないと思います。そして僕も・・・」

次の言葉をクウは待った。ケーは静かに続けた。

「その策はありません。皆目検討がつきません」

ガクッと、危うく首を折りそうになってしまった。何か稼ぐ上での秘訣を教えてくれるかと、クウは思っていたのだ。

「僕は商売のプロでも、絵のプロでもありません。一教師です。ですが大切なことはそれを自分で考えるということだと思います」

「自分で考える・・・ですか」

「そうです。どうやったら一日2万リラ、絵で稼げるのか必死になって考える。どうすれば人はお金を払うのか、自分はどういう時にお金を払いたいと思うか。どうするとお金を払いたくなるようになるのか。ひたすら勉強するといいと思います。そしてそれを毎日続ける。それが稼げるようになる何よりの近道だと思います。

最後におまけです。人はどういう時に価値を感じ、お金を払いたくなるかということです。人は驚いたとき、感動した時に、”すごい”と思います。”すごい”ものには、滅多に会えないので、価値を感じる動物です。”すごい”ということをキーワードにするのも良いでしょう。

あとはその人が不足しているもの。目に見えるものはおすすめしません。目に見えるものはわかりやすいので、王様やお金持ちたちが、すでにその市場を独占しています。おすすめは目に見えないものです。目に見えないからゆえ、王様やお金持ちたちは気付いていません。だから狙い目です。目では見えないもの。例えば安心感や愛情、賞賛など、人間がどういったことをされたら嬉しいのかを、ひたすら観察することです。商売は人を相手にするのですから、人のスペシャリストになる必要がありますよね」

目に見えないもの。これも重要なキーワードだなと、クウは感じた。

「クウ君は、心のどこかで、自分が描いた絵を、どこにでもある、ただの普通の絵を思っているんじゃないですか。そう思っていると、必ずそれは相手にもバレます。自分が価値を感じていないものは、相手も価値を感じません。もしかすると千回やったら一回くらいは価値を感じてくれるかもしれません。ただそれは運次第なだけで、効率も非常に悪いです。継続は難しいでしょう。そこを見込むべきではないです」

クウは一言も漏らすまいと思い、ケーの話を聞いた。

「自分が欲しいもの、価値を感じるものを、発明するのです。新しく、この世にないものを作り上げる。ただ、もう実は世の中にはあるのかもしれない。クウ君が知らないだけかもしれない。でも作り続けるんです。毎日、毎月、毎年、諦めず。自分の夢に向かって。
もしかしたら、叶わないかもしれない？それはもう思わないって、さっき言いましたよね？やり続ける。自分の夢のために。それが人生です」

とんでもない話を聞いてしまった。クウは思った。なんて価値のある話なんだ。

「ケーさん、これはお世辞ではなく、素晴らしい話すぎて、お金を支払いたいくらいです」

「ははは、僕はどこかで、クウ君の欲しいものを提供できたようですね。もちろんお代は結構。まずはクウ君には、生きていくだけの十分なお金を支払ってくれる職場があるのですから、そこはしっかりと真面目に働いて継続するべきだと思います。その上で、クウ君オリジナルの商品をいくつも作って、世に発表する。一人が価値を感じるものであれば、世の中に同じように価値を感じる人は必ずいます。そこからはその人にどう届けるかを考える段階に入っていきます。その人はどこにいるのか、何を求めているのか、どうすれば届けられるのか。それを考えるのがいわゆる”集客”になっていきます」

クウは今日聞いた話をまずはメモに残し、何遍も振り返ろうと思った。そして途中から感じていた質問をすることにした。

「ケーさんはなんで、こんな商売のことに詳しいんですか。学校の教師をされているんですよね」

「僕は学校で教師もしていますが、自分で作ったアクセサリーの販売もしているんです。もちろん学校の許可を得てね。そのアクセサリーを販売する上で、いろいろな人から教わったエッセンスを、クウ君にもシェアしたというわけですよ」

なるほど、それで合点が行った。それにしても、ケーも色々と幅広くやっているなぁと、クウは思った。

今日ケーから聞いた話は良い情報が多すぎた。まずは自分で稼いでみる。そして夢への第一歩を踏み出す。クウはやっと人生の、スタートラインに立った気がした。

第6章　不安とはなにか

・不安でしょうがない

朝起きても、なんだか心がざわついている。

ここ最近ずっとそうであった。もしかすると、もっと前からそうだったのかもしれないが、ここ最近は顕著にそれを感じる。

なんだか不安なのだ。自分の好きなことを見つけ、それでなんとか食っていけないのか、日々自分だけのオリジナル商品が作れるよう、研究していた。

クウの好きなものは絵であった。最近嬉しいこともあった。絵が売れたのだ。二束三文にしかならなかったが、確かにお金を払って、お客さんが買ってくれた。純粋に、クウの絵に対し、誰かが見つけ、それを良いと思い、お金を支払ったという一連のプロセスをしてくれたことが、非常に感慨深かった。好きなことを続けてよかったと思った。もう、好きなことを始めて、5年以上が経過していた。

しかし冷静になって考えてみると、どうやってもこれで食っていけるとは思えなかった。このような二束三文では、一日何十枚と絵を売っても食べていけない。この商売でやり続けるのはとてもじゃないが、非現実的だと思った。

クウは本業として、皮製品を売る仕事で生計をたて、家族を養っていた。自分が好きだからという理由だけで、絵に専念するわけにはいかなかった。今、本職でちゃんとした収入があることに感謝し、それはそれとして続けるべきだと思っていた。

そう思うと、いつまでこの生活が続くのだろうと、クウは思った。好きな絵は、仕事や育児、家事の合間に続けられるが、絵を描くことを中心とした生活に、いつになったらなれるのか。もしかしたら、自分の人生がこのままの状態で続き、終わるのではないか。そう思うと、不安でモチベーションが下がってしまうのであった。

クウはまた、休日の朝に、いつもの小川に行こうと思った。そう、ケーに会うために。

「なるほど、自分の夢が達成できないのではと思って、不安・・・ということですか」

ケーはいつものように、親身になって、クウの話を聞いてくれた。それだけでクウは心が軽くなったような感じがした。

「夢に向かう時って、不安ですよね。そもそも実現するかどうかなんて、誰にもわからない。それでも歩み続けないといけない。霧の中を歩いているのと、同じようなものですからね」

「一体どうすればいいんでしょう。今の自分は本当に幸せ者だと思います。好きなことができて、収入があって、家族がいる。それなのにぼくはまだ欲しがっている。もっと自分本位な生活を。欲との戦いという感じです」

クウはため息をついた。なぜ人生というのはこうも苦しいのだろう。うまくいかない、それに対して、非常にイライラとした感情を持ってしまっていた。

「僕の話をするとね・・・」

そう言って、ケーは昔の自分の話を始めた。

「前に話したかもしれないけど、僕は教師の仕事以外に、アクセサリーを売る仕事もしているんです。最初は全然売れなかった。まったくね。あぁ、やっぱり自分には無理なんだ。商売なんてできる

はずない。僕はアクセサリーが好きだけど、それで食っていけるなんて、甘い話だったんだなってね」

ケーは微笑を浮かべながら、当時を振り返った。

「そう、僕はいっとき、絶望したんです。もう無理だ、あきらめようってね。でもね」

少し言葉を区切ってから、ケーは続けた。

「不思議なことに、また始めてしまうんです。アクセサリーを売るのを。不思議ですよね。もう売れないし、やっても意味のない、無駄なことだと頭ではわかっているのに、体は動いてしまう。不思議だなと思いましたね。そしてずっと続けるも、一つも売れずに十年の月日が経ちました」

「十年!?」

クウは驚いてしまった。十年も、何もリアクションがないのに、一つのことを続けられるものなのか。

ケーはニカっと笑って答えた。

「ええ、十年です。何も起きずに十年。僕が伝えたいのは、十年頑張ったら売れるようになるということではないんです。僕が伝えたいのは、結果は求めないということなんです」

結果を求めない？それではいけないと、直感的にクウは思った。もしアクセサリーをケーは誰かに買って欲しいということであれば、それは相手のことをよく観察し、”買ってもらう”という行動を起こしてもらわないといけない。別に買ってくれなくて良いです、僕は自分の好きなものをただ作っているだけです、というスタンスだけでは、いつまで経っても食っていけるようにはならないと、クウは思った。

「でもお言葉ですが、ケーさん。もしアクセサリーを買って欲しいんだったら、ちゃんと営業するというか、買ってもらうように努力して、結果を残さないといけないんじゃないですか」

うんうんと、ケーはうなづいた。そして言葉を続けた。

「もちろん、クウ君のいう通りです。商売であれば、ちゃんとお客さんの動向やニーズを掴み、それを商品に転化させる必要があります。でも、僕は気付いたんですよね。アクセサリーを売る真の目的を。」

真の目的？真の目的とはなんだろう。クウが不思議がっていると、ケーは続けた。

「僕がアクセサリーを売る本当の理由。最初はアクセサリーを売って、それで食っていければ良いと思っていました。そうすれば自分は自分だけの商品を売って、どこにも縛られず自由になれるってね。それとは別の感情として、僕が良いと思ったアクセサリーを誰かに認めて欲しいという願望から、自分のアクセサリーを買ってもらいたいと思っているってね」

クウはハッとした。なるほど、目的が二つあり、それが混同していたということか。

クウは自分の身に置き換えてみた。クウは今、絵だけで食っていきたいと思っている。そうしたら自分の好きなことだけやっていれば、お金が入ってきて、それで暮らせるのなら、これ以上のハッピーはないと思っている。

その一方、自分が良いと思った商品、つまり絵を誰かに認めて欲しいという願望も確かにあった。その絵、良いですね、素敵ですね、と言ってもらいたかった。

「これを承認欲求といいます。」
ケーは言った。

「僕は何もかもから離れて自由になりたいという願望と、商品というある意味自分の化身のようなものを、誰かに認めてもらいたいという承認欲求というものが、ぐちゃぐちゃになりながら、アクセサリーを作り、それを売っていたんだなと気付いたんです。アクセサリーを作るのは純粋な"好き"から

派生したもの。そしてそれを売るのは誰かに認めてもらいたいから。そしてその後に、それでお金をもらって、自由になりたいという願望。このような順で自分の中の気持ちが動いていることを発見したんです」

さすが、ケーだ、とクウは思った。ケーは本当にあきらめずに自分と対峙し、自分の心の機微な変化を気付き、こうしてクウに向かって説明している。心という目に見えないものを言葉として認知できるものに変換できているケーの手腕に、クウは舌を巻いた。

「僕はここで、いつも接している、学校の生徒たちのことを思い出したんです。子どもたちは何かに夢中になる時、本当に集中しています。そして楽しそうです。自分の制作物が完成すると、僕や他の子どもたちに必ず自分の作品を見せます。どう、これすごいでしょと。僕がアクセサリーを売っていたのもこれと同じだったんです。自分を認めて欲しいという気持ち。これは集団生活を営む僕ら人類が、本能的に持っているものだと思います」

「なるほどですね、だったらぼくの場合、どうすればいいんでしょう。絵を描くことは純粋に楽しいです。だからこれは続けたほうが良いと思っています。ただ、その後の工程がうまくいっていない。まず、誰にも見てもらえてない。この承認欲求が満たされていないことに、まず問題があるんでしょうか」

「そうですね、クウ君の場合は、第二段階で行き詰まっているように見えます」

そう言って、ケーは地面に図を書いてくれた。

→

自分の好きなことをする **「楽しい」** **「おもしろい」**	**誰かに見せる** **「すごいと言ってもらいたい」** **「褒めて欲しい」**	**対価を得る** **「お金をもらう」** **「ありがとうと言われる」**

「僕のさっきの生徒の例のように、まず人間は本能に基づき、何かを制作します。出来上がると、それを誰かにシェアしたくなります。そして、あわよくばそれで人の役に立ち、対価を得ようとします。これが人間の制作行為と、承認欲求の流れだと、僕は分析しています」

ケーは説明を続けた。

「クウ君の場合は、自分の好きなことはもう見つけて、どんどん創作行為を続けています。これは素晴らしいことだと僕は思います。しかし、その後の誰かからのフィードバックが欠けている。それにその次の工程の対価を得ることもできていない。このダブルパンチがモチベーションを下げている要因だと思います」

「どうすれば良いんでしょうか・・・」

クウはしょんぼりした顔で、ケーに尋ねた。

「まず、自分の制作物をもっと人に見せることです。気をつけなければいけないのが、それで対価を得ようとしないことです。対価を得るのは次にフェーズです。まずは承認欲求を満たすことから始めてください。

そのためには、あまり遠くの人には見せないことです。クウ君と関係が薄いと、あまり良いフィードバックは返ってきません。家族とか仲の良い友達か、そういったところから始めた方がいいでしょ

う。そのほうがクウ君をよく知っているので、良いフィードバックが返ってきます。まず、関係が薄い人からは、そもそもフィードバックすら返ってきませんからね」

その時、クウはハッとした。確かに、クウの絵はあまり身近な人に見せていなかった。それは恥ずかしいとかそう言った理由から来ているものだった。

「ケーさん、今日もありがとうございます。ぼくは一番先に見せるべき、家族に、ぼくの絵をあまり見せてこなかったかもしれません。そうではなくて、どこにいるかもわからない、誰かが、勝手にぼくの絵を見て素晴らしいと言ってくれる幻想を抱いていたのかもしれません。まずは今目に見える人たちにぼくの絵を見せて、第二段階から満たしていこうと思います」

クウは胸のつかえが取れたような気がした。

そしてケーは言った。

「ちなみに、僕は、クウ君の絵、好きですよ。うまいというか、美しいというのとはちょっと違って、なんていうのかなぁ。優しい感じがやっぱり絵から伝わってくるんです。それを見ると、心が落ち着くんです。もちろん絵画作品としてだったら、世の中に素晴らしいものはたくさんあるんでしょう。でも僕はクウ君のことを知っているし、それを知っている人間からすると、やっぱりクウ君の絵からは優しさを感じ、僕はそれが好きなんです」

クウはケーからのフィードバックに対し、感謝しながら受け取った。

クウが不安に感じていたのは、これからの未来がどうなるかという不安だった。しかしケーの分析によると、その不安は承認欲求が満たされていないことからも来ていることがわかった。

おそらく不安というのは分解してみると、さまざまな要素に分かれるのだろう。今回はたまたま承認欲求によるものだったが、次くる不安の正体はまた別なのかもしれない。その時はしっかり原因を分けて、調査しようと、クウは感じた。

それにしてもまずクウがやることは、身近な人に自分を見せること。それを続けていこうと思った。

第7章　許しとはなにか

・できない現状

「それで・・・、まだできないんですか？」

クウは、職場である「チョウリ」の、ある部屋にいた。

クウの目の前にはチェケラがいた。チェケラは、クウが勤めるチョウリで、お金周りの管理をしている人だった。

ちなみにチョウリでは皮製品を売っており、クウはそれを近くの村々に売る仕事をしていた。クウは今月、百足の革のブーツを売る予定だった。もっと詳しく言うと、1年間で千二百足のブーツを売る目標を立てられていたので、月で換算すると百足を売らなければならない。それで今月は百足のブーツを売ろうと頑張っていた。

しかし今月もあと一週間となったところで、まだ30足しか売れていない。その進捗の遅さに、管理をしているチェケラから呼び出しをくらったというわけだ。

「すみません、今月は思ったように売れなくて・・・。今までとは違った村に行ってみたりしているのですが、なかなか話を聞いてもらえなくて」

クウは神妙そうな顔で報告した。

「それは私には言い訳にしか聞こえませんね。進捗が悪かったのであれば、私や他の人に報告するなりして、リカバリーの手段を取れましたよね。それはなぜやらなかったのですか？」

「それは・・・確かにそうですが、なかなかそこまで頭が回らずに、、、すみません」

チェケラはさも小馬鹿にしたような顔でクウを見て、言った。

「あなた、何年この仕事をしているんですか。途中でまずいと思ったのなら、まず報告でしょう。新人じゃないんだから、そのくらいちゃんとやってくださいよ」

「申し訳ありません」

クウは言い返したい気持ちがあった。予定していた注文が急に入らなくなったり、天候が崩れてなかなか村に訪問できなかったりと、できなかった理由は多くあった。

しかしそれは今言っても全て言い訳になってしまうと思った。言い訳はしてはいけないことだ。自分の非を認めよう。そう思い、じっとクウは我慢をしていた。

「そもそも、あなたは年間千二百足のブーツを売る予定ですが、今月だけでなく、この年間の数値も全然進捗率が良くないですね。このままでは年の終わりに、ひどい目に遭いますよ。どういう計画を今後立てているのか、教えてください。当然ありますよね？」

「それは・・・」

「ないんですか？」

「考えてはいますが、形になったものは特に・・・」

責められれば責められるほど、ひどく自分がみじめでダメな人間に思えてきた。自分はできない人間なのだ。人の役に立てない人間なのだ。そんな人間はいる価値はあるのか。マイナスの思考がぐるぐるとクウの頭の中を駆け巡った。

その時、ある男が声をかけた。

・反抗しないと舐められる

「なにか打ち合わせですか？」

チェケラとクウに声をかけてきたのは、カナッサだった。カナッサはチョウリの中でも一、二位を争う皮製品を売ってくる人で、クウの十個くらい年上の人だった。

クウを目にかけてくれ、昔から色々と世話をしてくれた。

「いえ、別に・・・。なにかあなたに関係ありますかね」

鋭い声でチェケラは言い返した。

「いえね、だいぶ、お説教の具合が厳しいと思ったのでね」

ニカっと笑って、カナッサは言った。

「さっきから聞いてましたけど、色々クウに言ってましたが、そんな状態なのを放っておいた、あなたの責任もあるんじゃないですか？」

「それは・・・」

チェケラは言い淀んだ。そこにカナッサは言い放った。

「管理するのがあなたの仕事であれば、できていないのはクウの責任ではなく、あなたの責任でしょう。それを一方的にクウに叱責するのは見届けられませんね。叱るより前に、しかるべきことをするべきなんじゃないでしょうか。・・・しかるだけに・・・なんちゃって！」

そう言って、カナッサはガハハと笑った。こういう男気と、ジョークを交えたコミュニケーションができるのがカナッサの魅力だった。

「もう・・・なんだか怒る気が失せました・・・。クウさん、とりあえずリカバリーのスケジュールを明日までに提出してください。それでは」

そう言って、チェケラは去っていった。クウははぁとため息をついた。

「カナッサさん、すみません、助けていただいて」

「別にお前を助けたわけじゃねえよ。なんだか見てて胸糞悪かったから、割って入っただけだ。でもよう・・・」

そう言って、カナッサはクウを見て、言った。

「もっとお前、言い返せよ。あれじゃあいじめっ子といじめられっ子の構図だぜ。お前の仕事を見ているけど、お前はよくやってるよ。お前の担当している村は村人の気質が荒くて、売り辛え。俺だって、他のみんなだって、おんなじような結果になっていただろうよ。だから、もっと反抗していいんだよ」

「それはわかっているんですが、チェケラさんの言うこともっともな訳で・・・。それに言い訳をするのは苦手で」

「お前、そんなんじゃ、ずっと言われっぱなしの舐められっぱなしだぜ。まあでも、性格だから、もうそこはどうしようもねえよな」

そう言って、カナッサはポケットからタバコの箱を取り出した。

「ちょっとタバコ行こうぜ」

・自分を責めてはいけない

チョウリの職場の裏手には少し敷地があり、そこでタバコを吸ってもいいことになっていた。

他にも数人のスモーカーがタバコを吸っている。クウは吸わなかったので、カナッサに付き合う形になった。

「そういえば、お前絵を描いているんだって？」

どこから聞いたのか、カナッサは、クウが自分の好きなことである絵を、描いていることを知っていた。

「そうです、よくご存知ですね。趣味の一環で」

「今度見せてくれよ、お前の描いた絵、興味あるわ。俺、けっこう絵とか建築とか好きなんだよ、こう見えて」

クウは照れながら答えた。

「ありがとうございます、では今度」

「で、お前どうすんだよ、これから先。絵で食っていくとか考えてんの？」

「いえ、なかなかそれは難しいとは思ってます。もちろんできたらいいですけど」

カナッサは一呼吸おいた。少し言おうか迷っている様子だった。

「正直言うけどよ、お前、この仕事向いてないよ。お前が悪いと言っているわけじゃない。魚を山に放置させているようなもんだ。お前の優しい性格では、この切った貼ったのセールスの世界じゃ、心を病んじまうって、前みたいによ」

そう、事実、クウは二度、心を病んでチョウリを休んでいた。それぞれ1ヶ月ほどの期間であったが、仕事に疲れ、動けなくなってしまっていた。クウはそれをチョウリのみんなに申し訳なく思っていた。

「お前の良さをもっと活かせる場が、他にあると思うんだけどなぁ」

カナッサは本当にクウのことを思って言ってくれていた。昔からクウのことを知っているからこそ、このまま続けてもクウが辛い目にあうだろうことを予見していた。

「でも、なんだか逃げのような気もしているんです」

「逃げ？」

「はい。自分が苦手な今の仕事から逃げている。もっと自分を直せば、人の役に立てる、そんな気がしているんです」

自分が悪いんだ、できない自分が悪いんだ。だから自分を直さなければいけない。クウにはまだ深いところで、呪縛の心が残っていた。

「お主は真面目すぎる」

そう声をかけてきたのは、少し離れたところでタバコを吸っていた老人であった。
老人と言っても、チョウリの従業員のはずなので、働いている人だ。だが、かなり年上のように見えた。

「そんな自分を責めてばかりでは、自分が可哀想じゃ。もっと自分を愛せねばならんよ」

そこにカナッサがぐいっと入ってきた。

「なんだ、爺さん。いちゃもんつけようってのか」

「フォフォフォ。お前さんは随分威勢がいいのぉ。さぞかしこの会社での成績もいいのじゃろう。さてそこの若いの。お前さんに一ついいことを話してやろう。」

「いいことですか・・・？」

うむ、とその老人はうなづいた。

「汝を愛せよ・・・じゃ」

「汝を愛せよ？」

「そうじゃ、自分を愛するのじゃ。自分を決して責めてはいかん。なにか相手から攻撃された時は守ってやらねばならん。」

「ですが、守ってばかりだと、自分を甘やかすことになるんじゃないでしょうか」

「それは愛とはまた別の話じゃ。愛とは自分を守ること、甘やかすこととは別じゃ」

「爺さん、その守るのと、甘やかすの違いがようわからねえ。たとえば俺には子供がいるが、子供のことを愛しているぜ。でも生意気聞いた時にはゲンコツをお見舞いするぜ。それがしつけだろう」

「お前さんも、まるでわかっておらんな。お主が与えているのは愛ではない。自分のいいように、子供に当てはめているだけじゃ。愛とはそんなものじゃない。愛とは認めることなのじゃ」

「認めること・・・ですか？」

「そうじゃよ。できていないことを認め、それを受け止めることができるようになったら、愛の第一歩じゃ。」

「おいおい、全然わからねえよ。相手の悪いことも受け入れようってのは、なんとなくわかるが、甘えはどこいっちまったんだ？」

カナッサのタバコはもうほとんど灰しか残っていない。それをお構いなしに、聞いていた。

「甘えはこちらの問題ではない。相手の問題じゃ」

「相手の問題？」

「そう、相手の問題。相手を受け入れるのが愛。とすれば受け入れてもらうのは相手の話じゃ。受け入れてもらえることにあぐらをかくことが、甘えじゃ」

なるほど、とクウは思った。つまりこの老人が言っていることは、甘えは相手方、愛は自分の話と、主語が違うと言っているのだ。

「つまり主語が違うということですか？」

「その通り。やはりお主は勘が鋭い。そこのガサツとは違ってな」

「あん？誰がガサツだって！？」

怒るカナッサをおき、老人は話を続けた。

「若いの、お前は非常に愛に溢れた人間じゃ。だが愛が大きな人間にはその愛が欲しいと色んなものがお主につけ込んでくるじゃろう。その道は非常に厳しく険しい。お主はその度何度も倒れるじゃろう」

クウは今まで仕事で二度休んでしまったことを思い出した。

「じゃがお主はその度に必ず立ち上がる。お主の愛の源泉は不死身じゃからだ。一度枯れてもまた蘇ってくる。お主のような人間がこの世には必要じゃ。自分で源泉に蓋をするような真似はせぬようにな」

その時、扉が開いて、かしこまった人が入ってきた。

「社長、そろそろお時間です」

社長！？もしかして、この老人は・・・・チョウリ社の社長なのか？
カナッサもクウも目を丸くして、固まってしまった。

「お主ら二人とも、個性は全く違うが、見どころがある。この会社はいい会社じゃ。チョウリという名は、具材を調理して、さらに良いものにしたいという思いをつけて名付けたものじゃ。お主らのような社員がいて、わしは嬉しいよ。頑張ってな」

そう言って、チョウリの社長はタバコの火を消し、去っていった。
その後にはポカンと口を開けて佇むクウとカナッサが立っていた。カナッサのタバコは全て灰になっていた。

「なんだよ・・・社長だったのか。めちゃめちゃひどいことをいっちまったぜ。クビにならねえかな」

「それは大丈夫ですよ・・・最後、なんかぼくたちに期待しているって言ってくれたし」

その事実とは別にクウの心の中では色々な思いが巡っていた。

クウはどうしても相手を思いやり、攻撃するなんて、決してできない性格であった。それはいいとか悪いとかそういう次元にあるのではなく、単にそういう性格なのだ。

別にそれはそれでいいんじゃないかと思えてきた。そしてなかなか皮製品が売れないのも仕方ない。まずは自分を許すことが第一歩なんじゃないかと思ってきた。

第8章　子どもとはなにか

・コップからこぼれる感情

「はぁ・・・」

気付けばまたクウは自分がため息をついていることに気が付いた。

ここはタール村にある唯一の図書館である。蔵書冊も500冊程度で、クウが働くチョウリがあるコンコルド街にある、中央図書館にはとても追いつかないが、クウにとっては憩いの場所である。

本はいい。本はこちらのペースで話を読むことができ、急ぐ必要がない。
もし難しくてわからない箇所があっても、読み飛ばせる。そして何年か経ってもう一度その本を借りて読んでみると、わかったりすることがあるから不思議だ。
クウは本という存在に、子どもの頃から触れており、その存在が好きであった。

「どうしたの？元気ないじゃない」

そう声をかけてくれたのは、図書の貸し出し業務を行っている、ゴシカである。ゴシカはクウより一回り以上年が上で、お姉さんというよりはお母さんに近いくらいの年代であった。
気前がよく、物事をはっきりというタイプで、図書館の業務をキビキビと回していた。

そう、クウは、休日に、自分の本と、あと子どもの本を借りに、図書館に来ていたのであった。

「あ、なんかわかります？元気ないの」

クウはゴシカに返答した。

「うーん、そうね。なんとなくね。クウくんの元気ない時は、すぐわかるからね。というか顔に出やすいというか、わかりやすいのよね」

すみません、と苦笑いをしてクウは答えた。

そう、クウが元気がない理由。また子どもに対して怒鳴ってしまったのだ。

クウは基本的に子どもをとても大事にしている方だと、自分でも思っていた。
子どもの言うことはできるだけやってあげたいし、注意する時はできるだけ平和的に解決したい。

だが、子どもというのは台風のようなもので、感情的に怒り出すと手がつけられないところもあるし、自分が仕事など考え事をしている時にそれをやられてしまうと、つい、「うるさい！」とか、「言うことを聞きなさい！」と、かえって自分がうるさいんじゃないかと後々振り返ると思う時がしばしばあった。

ただ、子どもから大声で泣き叫ばれると、どうしてもイライラとストレスが溜まってしまう。そうしてコップが満杯になって、水がこぼれてしまうように、感情が流れ出てしまうのだった。

「子どもが言うことを聞かなくて、つい先ほども怒鳴ってしまって・・・。それで勝手に落ち込んでいるんです」

「そういうことね・・・」

そう言うと、ゴシカは振り返り、事務所の方に向かって言った。

「館長、ちょっと休憩行ってきていいかしら？」

奥から暇そうな声で、「いいですよー」と声が返ってきた。

「今日は人もいないし、あとは館長に任せて少し休憩するわ。外のベンチで話しましょう」

ゴシカはそう言って扉を開けて外に出た。自然のいい香りがにおってきた。

・子育ての正解

「そんなに気にすることないわよ、クウくん。私もどんだけ子どもたち悪ガキに怒ってきたか。心配しすぎよ」

そう言って、ゴシカは入れたての紅茶を口にした。だいぶお砂糖を入れてから飲んでいる。甘党のようだ。

「ゴシカさんも、結構子どもには怒ってきたんですか」

「当たり前よ、怒るどころじゃないわ。お尻くらいペンペンよく叩いていたわよ。まあ、そういう時代だったということもあるわね。でも私は本当に気が早いから、すぐカチンときてしまうのよね」

「なんだか、そういう時に、自己嫌悪みたいな気持ちにはならなかったのですか」

明らかにクウとゴシカでは性格が違う。優しくて物静かなクウと、気が強くてせかせかしているゴシカでは子育ての方針は違うだろう。それでもクウは聞いてみた。

「自己嫌悪・・・みたいな大層な気持ちにはならなかったけど、言い過ぎたかなと思う時はあるわよね、そりゃあ。でもそん時はムカっとしたんだからしょうがないじゃない。そんなに後でくよくよと考えてもしょうがないって、切り替えちゃうわね」

「いいですねぇ、、、ぼくもそうやって割り切れればいいんですが。もっと上手くてきなかったのかと、後悔してしまうんです」

まあ、その気持ちもわからなくないわね、と言って、ゴシカは紅茶の二口目を飲んだ。そうしていると、図書館の扉が開き、男の人が入ってきた。太っているが、背が高い。白い髭を蓄え、メガネをかけている。少し猫背なそのかたは、この図書館の館長であった。

「館長〜。館長まで来ちゃったら、図書館の中、誰もいなくなっちゃうんじゃないですか」

ゴシカは館長を責めた。自分も休憩しているはずだが、クウは何も言わなかった。

「まあまあ。今日はお客さんもいないし、来たらすぐ戻りますからね。私も話に少し混ざらせてもらおうかなと思いましてね。それにしてもいい天気ですねえ」

そう言って、猫背な姿勢からぐーと伸びをして、さも太陽が気持ちいいというふうな顔を、館長はした。

「それで、子どもを叱る話でしたかね。クウさんでしたかね。わかりますよ、子どもを叱って後で後悔する気持ち。私も昔ありました」

「館長さんも、お子さんに叱ったりしたんですか？」

クウは尋ね、それに館長は答えた。

「ええ。今はこんなですが、昔は亭主関白の頑固親父でしてね。子どもにはそりゃあスパルタな教育をしたものです。それに仕事も忙しくてですね。日々イライラ、せかせかしながら生きていました。なので子どもへの当たり方も、かなり厳しくしてしまったと思います。そのせいか子どもがグレてしまいましてね。このタール村から出て行ってしまいました。今はどこで何をしているやら」

そうだったのか。クウはこの館長さんと話すのは初めてだったが、非常に温和そうで、優しいおじさんといった第一印象だった。それが昔はスパルタ教育をする父親だったとは、正直今のイメージからは想像がつかなかった。

「そこから私も随分と悩みましてね。自分のやり方がよくなかったのか。それとも私は正しくて、それに耐えられなかった息子の方がよくないのかとかね」

ゴシカも館長の話を聞いていた。３口目の紅茶はまだ口にしていないようだ。

「散々考えましたが、何が正しかったのか、今でもわかりません。いえ、結局正しいことなんてないのかもしれません。ただ一つだけわかったことがあります」

「それってなんだったんですか」

クウよりも先にゴシカが聞いた。館長はゆっくりと口を開いた。

「自分が子どもを愛していたかどうかです」

「愛していたかどうか・・・」

「ええ、結局私の教育は、私のわがままで、押し付けがましいものだったのかもしれません。それに良くないことに、仕事のストレスを子どもにぶつけていたのかもしれません。最低だったと今は思います。ですが、それでも『あなたは子どもを愛していますか』と聞かれたら、やはりイエスと答えると思います。親に必要なことは教育とかいうよりも、子どもを愛すことなのかもしれないと」

風がざあっと吹いた。葉っぱが舞い落ちる。気持ちの良い天気は続いていた。

「私はどうかなぁ、子どもの教育のこと。難しいことは私もわからないけど」

そうゴシカも話し始めた。

「私も子どもたちのことは大好き。目に入れても痛くないし、それこそ何かあったら命懸けで助け出すと思う。でもそれと同時に、本当に腹が立つ時もあるのも本当。子育てって本当に難しいわよね。でも子どもはそれでも勝手に大きくなって、巣立っていく。あとから見れば、本当にあっという間の出来事だったと思うわけ」

ゴシカはぐいっと紅茶を飲み干した。

「なんだかおばさんとおじさんの話ばかりになってしまって、ごめんなさい。ほら、館長も謝って」

ゴシカは館長に、謝罪を求めた。ごめんなさいと、館長は素直に頭を下げた。

クウは考えた。ぼくにとっての子育てとはなんだろう。子どもたちのことを本当に愛している。そこはゴシカと似ている気がしている。そして、腹が立つ時もあるというのもある。

そして昔の館長みたいに、自分が正しいと思ったことを子どもに押し付けてしまっていることもあると思う。それに仕事や他のストレスを、子どもに吐き出してしまっているんじゃないかと危惧するところもある。

クウは少し考えたあと、口を開いた。

「ぼくも子育てって本当に難しいことだと思います。仕事や自分の好きなことをやりつつ、自分とは違う存在と生きていく。ものすごいバランス感覚が必要な、ある意味仕事だと思います。

ただ仕事と違って、非常に感情的で私的な部分も持ち合わせていますよね。自分の血を引いているところだったり、家族だったりするところが。そういうやらなきゃいけないのに、話をちゃんと聞いてくれなかったりで上手く行かないところ、それでもやっていかなきゃいけない。それに家族だから、仕事と違って、『はい、やめた』とはなれないところ。そういうわけのわからないものに、親は直面するんだと思います」

「そうね、本とは違って、自分のペースで読めないし、読み飛ばすこともできない。じっと見据えて、時には待って我慢して、一緒に伴走しなきゃいけない」

ゴシカは独り言のように呟いた。

気づけば館長がいない。図書室の方に戻ったのであろうか。

そう思っていると、館長が図書室から戻って来た。手には一冊の本を持っている。

「それは？」

クウが尋ねると、館長は答えた。

「お子さんと読むと、良いかもしれません。おすすめの本がありましてね」

館長が持ってきてくれた本は、かわいいタッチの怪獣が描かれた本であった。

「これはどういう本なんですか」

「ひとりぼっちの怪獣が、本当は一人で寂しいのに、強がって、周りに危害を加えたりする話でしてね。それを見かねた町の人が怪獣を退治しようとするのです。怪獣を山に追い込み、とどめをさそうとする時、一人の少女がそれを止めます。彼にチャンスをあげようと。反省するんだったら許してあげようと。

それに心を動かされ、怪獣は人に優しくしようと決心します。最初は上手くいかず、町の人とトラブルになったりするのですが、じきに上手く行っていきます。そんな時、隣の村が攻めてきて・・・と話の展開もおもしろいんです」

そう言って、館長はクウにその本を渡した。

「なんでよりによってこの本なの？」

ゴシカは館長に単刀直入に聞いた。

「まあ、純粋におもしろいというのもあるのですが、実はこれをお子さんと一緒に読んで欲しいのです」

「一緒に・・・ですか？」

「そうです、いわゆる読み聞かせです。私が唯一子どもにしてあげられてよかったなと思うのが、読み聞かせです。職業柄、本には多く触れていたのでおすすめの本を読んであげていました。子どもは毎晩私に本を読んで読んでとせがんだものです。その時間はあとから思うとかけがえのない時間でした」

「読み聞かせ、確かにいいわよね。私も子どもが小さい頃はしてあげていたわ。まだ字が読めない時はね。なんだか子どもって、その時のこと、よく覚えているのよね」

読み聞かせ。それは子どもと親の二人だけの空間と時間なのかもしれない。

子育ての正解なんてわからない。そもそも正解なんてないかもしれない。だがクウは、館長が言っていた、子どもを愛する気持ちと、子どもと二人だけの時間を作ることは、何よりも二人にとっての大切な思い出になると信じてやまなかった。

クウは二人にお礼を言って、ゴシカが入れてくれた紅茶を飲み切った。そして館長から貸してくれた怪獣の本を持ち、背筋をまっすぐにして、うちに帰るのであった。

第9章　許せないとはなにか

・チェケラの苦悩

なんでどいつもこいつも使えない奴らばっかりなんだ。

チョウリで働き、お金周りの管理や、部下の教育も行なっている、チェケラは悪態をついた。

ここ数年で、チョウリの業績は確実に悪化していた。チョウリでは職人が作った革製品を、近くの村々に販売していたが、その販売量が下がっていた。

原因は既存の皮製品に慣れていたのと、かなり耐久性が高いので、なかなかリピート購入が伸びないのが原因だった。

いっそのこと、もっと耐久性を低くして、すぐに壊れる製品にすればいいのではないか。

そうすれば、もっと次購入するまでのサイクルが短くなり、チョウリ社の売り上げが伸びるのではないか、そんなことまで、チェケラは考えていた。

チェケラがチョウリで働いて、もう二十年が経とうとしていた。

チェケラはタール村というところの出身であった。

父親は人にお金を貸す仕事をしていた。人にお金を貸すというのはものすごくストレスがかかる仕事だ。もしかすると返してくれなかったり、逃げ出すかもしれない。それで父親はいつも不機嫌でイライラしていた。

また性格も非常に厳格で、本当に怖い存在であった。またこうしろああしろという指示がとにかく多く、それが嫌で、タール村を出て、この、チョウリがあるコンコルド街に出てきたのであった。そんな恐れの存在であった父親だが、夜寝る前に必ず本を読んでくれた。それが子どものチェケラにとっては何よりも楽しみであった。今は金貸しの仕事はやめ、なぜか図書館で働いているらしい。人間、変われば変わるものだ。

そんなことはどうでもいい。今は目先の売上のことが大事だ。どうにか今年中に売上を少なくとも昨年ベースに戻さなければいけない。

チェケラはノートを広げ、帳簿の計算をし直した。

しかし仕事をしていても、イライラが募ってくる。なんで俺だけがこんな苦労をしなければいけないのか。もっと他の奴らが製品を売ってくれれば俺はこんな辛い仕事をしなくても済むのに。俺は悪くない。悪いのは他の全員だ。

イライラしていると、ギュッと心臓が痛くなった。慌ててチェケラは医者から処方されている薬を飲んだ。ストレスが急激にかかると、胸が痛くなり、呼吸がしにくくなるのだ。水で薬を飲んで少し落ち着いた。

もう真夜中で、チョウリ社の中には自分一人しかいない。

誰も自分を心配してくれない。なんだかチェケラは疲れてしまい、急にふるさとのタール村に帰りたくなった。

「チェケラさんが少しの間、休むらしいぜ」

そう言ってきたのは、チョウリ社で、クウの先輩である、カナッサだった。

そう、クウの仕事周りの管理をしてくれているチェケラがしばらくの間休むと、さらに上の人から先程連絡があった。あんなに仕事人間だった人がどうして。クウは自分が仕事ができないせいで、心労をかけてしまったのではないかと不安になった。

「まあ、あの人頑張りすぎていたからな。人間、休みも大事だよ。休み方を知ってないと、息切れしちゃうからな」

そう言って、カナッサはタバコを吸いに、外に行ってしまった。

上の人から聞いて初めて知ったのだが、チェケラもタール村の出身だったらしい。クウと一緒だった。しかし、チェケラのことは全然知らなかった。村といえども500人くらいはいるから、知らない人もたくさんいる。どこに住んでいたのだろう。クウは不思議に思った。

・ふるさと

ふるさとに帰るのは二十年ぶりだ。コンコルド街に出てそこから一度も帰ってきていない。

チェケラはタール村に帰ってきていた。なんだか疲れてしまって、もうどうでも良くなってしまっていた。チョウリ社に連絡をし、二、三日休むことにしていた。

ふるさとは変わってはいなかった。厳密にいうと、少し建っている建物とかは変わっているが、子どもの時に見た風景とそこまで変わっていない。

チェケラは家に帰った。しかし誰もいない。父も母も仕事に出ていた。父の方は今は図書館で働いているらしい。

チェケラは父のことが気になっていた。あれだけ仕事熱心で、厳しかった父親が、なぜ仕事をやめ、今は図書館で働いているのか。チェケラの足は自然に、タール村図書館の方に向いていた。

図書館も変わっていなかった。昔ながらの木で作られたしつらえで、光が入ってくるのが美しい。図書館にはほとんど人はいなく、カウンターには女性が一人座って、図書の整理業務をしていた。

「こんにちは」

その女性はチェケラに挨拶をした。

どうも、という感じで、チェケラは軽く会釈をした。

「見ての通り、ほとんど人はいないわ。最近は本を読む人が減ったのかしらね。あなた、今日仕事はお休み？ゆっくりしていきなさいよ」

よく喋る人だな、とチェケラは思った。ただここで、父親を呼び出すのはなんとなく気が引けた。

仕事をしている最中だろうし、それを邪魔するのはなにか気が引けた。まだチェケラの中では怖い父親の存在が残っていた。

「ゴシカさ～～ん」

聞いたことのある声が聞こえた。

そしてカウンターの奥にある扉から男が出てきた。

一瞬わからなかったが、それはチェケラの父親だった。だいぶ太って、白髪になったが、それでも自分の父親だった。

「チェケラ・・・。お前、なぜ・・・」

父親の方が驚いた様子だった。自分の仕事場に、20年以上前に出て行った息子がやってきたのだ。そりゃあ驚くだろう。

「なに、あなたたち知り合い？」

ゴシカも驚いた様子で、二人を見比べた。

「あら、あなたたちそっくりじゃない。もしかして、前に言っていた、館長の息子さん？」

ゴシカはすぐに合点がついたようだ。

父と息子は図書館の外で、少し話すことにした。

・思い出

二人はベンチに腰掛けた。

二人の間に、非常によそよそしい空気が流れた。

そもそもものすごく怒られながら育ったため、潤滑なコミュニケーションというのを、チェケラは父親としたことがなかった。だから20年経った今も、何を話したらいいのかわからなかった。

「急に驚いたよ。帰ってきてくれたんだな。仕事は今何をしているんだ」

図書館の館長である父は、チェケラに聞いた。

「別に・・・コンコルドで、普通の仕事をしているよ」

「結婚はしたのか？」

「まだしてないよ、別に、やる必要もないし・・・」

「そうか・・・」

そこで一旦会話が途切れた。

二人は並んで座っていた。だから横目でチラチラと見るだけであったが、父親は本当に人が変わってしまったようだった。

昔のような高圧的な雰囲気は一切なくなり、今は人のいいおじさんといった形になっている。

「父さんは、どうして図書館で働いているの？」

チェケラは気になっていたことを聞いた。それを聞きに、図書館に来たようなものだった。

「私か・・・？そうだな。なんだか金貸しの仕事に疲れてしまってね。

あの仕事はお金という数字としてはっきり出てしまうものを扱う仕事なんだ。そしてそれが大きくなったら会社から喜ばれるし、少なかったら怒られる。なんだか数字に振り回されるのがバカらしくなってしまってね。それでやめてしまった。母さんは応援してくれたよ。

そして、好きな仕事、図書の仕事についたんだ。昔から本は好きだったからね。もうお前も出ていってしまったし、母さんも仕事をしている。もう自分の好きなことをやってもいいのかなって思ったんだ」

そう、父親は本が好きだった。仕事は忙しかったが、本は読んでいたイメージがある。

「いいね、好きなことを仕事にできて」

チェケラは幾分嫌味を含めて言った。

「お前は、好きな仕事ではないのか」

「好きなもんか、仕事なんて。生きるため、食うためにやっているんだよ。父さんみたいに、甘くないんだよ」

チェケラはつい攻撃的に言ってしまった。今の父親は昔の怖かった父親と違い、老いている。自分の方が強い。それを自覚すると、途端に強気に出れることにチェケラは気がついた。

「まあ確かに・・・。父さんは恵まれていると思う。好きなことを仕事にできて、このタール村で母さんと過ごせていることがな。そういえばお前は昔・・・」

図書館の館長でもある、チェケラの父親は遠い目をして言った。

「絵を描くことが好きだったよな」

チェケラはそれを聞いた途端、とても恥ずかしくなった。自分の歴史から抹消したい出来事の一つだった。

「やめてくれよ、そんな昔の話」

「いいじゃないか、私はお前の絵は実は好きだったんだ。そんな恥ずかしいこと、当時は言えなかったけどな。タッチが独特というか、さすが私の息子だと思ったんだ」

「やめてよ・・・」

「いやいや、謙遜することはない。家にも残しているんだ、お前の絵を。たまに母さんと一緒に見ることがあるんだ。ついこの間も・・・」

「やめてよ!!!」

ついチェケラは大声で叫んでしまった。

しいんと場が静まる。館長はきょとんとした顔をしていた。

今更なんなのだ。自分いい父親だったと言いたいのか。自分は子ども時代に圧迫されて育った。それに絵のことも、他のことが大事だからと疎遠にしたつもりだったのに、実はそれが好きだっただと?もういい加減にしてほしい。ここに来たのは間違いだった。

「ごめん、もう行くよ」

チェケラは立ち上がって、足早に去っていった。

・さよなら

タール村に唯一ある駅で、列車を待っていた。

チェケラの心は沈んでいた。来なければよかった。父親に会わなければよかった。

父は変わっていたのだろうか。なんとなく深層は昔と変わっていなかった気がする。風貌は変わっているのかもしれないが、心の奥底にあるものは昔と変わっていない。それがいいことなのか、悪いことなのか、チェケラにはわからなかった。

もうすぐ列車が来る。待っていると、後ろから一人の女性が走ってきた。

「待って！」

どこかで見たことがある。図書館のカウンターにいた女性だった。ゼエゼエと肩で息をしている。ずっと走ってきたのだろう。

「待って・・・あー疲れた。ちょっとあなたに言いたいことがあるの」

「なんですか」

怪訝そうな顔でチェケラは言った。もう一刻も早く、ふるさとから脱出したかった。

「別に親子の問題に他人の私が口を突っ込む気はないけどね、人は完璧じゃないのよ」

「完璧じゃない？」

なにかお説教が始まる気がして、チェケラは辟易した。

「そう、完璧じゃない。館長だって一人の人間。完璧じゃない。父親としても完璧じゃない。そもそも完璧なものなんてない」

「それが私とどう関係があるというんですか？」

冷たい目でチェケラはゴシカに話した。もうどうでもいい、全ては間違いだったんだ。

「チェケラ！」

気がつくと、父親もゴシカの後ろにいた。彼も肩でぜいぜいと息をしている。無理をして・・・。チェケラは憐憫の気持ちを覚えた。

「もう俺は帰るよ」

チェケラは父親に言った。

父親は黙っていた。何かを考えているらしい。そしておもむろに口を開いた。

「ごめん」

それはチェケラにとって予想外の言葉であった。それにごめんという言葉は、父親から初めて聞いた言葉だった。

「チェケラ、すまなかった。昔、子どものお前に冷たく接して。言い訳になってしまうが、仕事でうまくいかなくて、お前に当たっていたところもあったと思う。

でも本当はお前のことを愛していたんだ。本当に。それに今でもお前のことを愛している」

チェケラは自分の目が潤んでいることに気がついていた。

「いつでも帰ってきていいから。体には気をつけてな。母さんと会えなかったら、今度は休みの日に帰ってきなさい、いいな」

「ああ・・・」

チェケラはそれだけなんとか口から絞り出した。

その時列車がやってきた。扉が開く。そして列車にチェケラは乗った。

さよなら。そう言おうとしたとき、チェケラの胸から言葉が飛び出してきた。

「・・・俺は寂しかったんだ。もっと父さんと遊びたかった。二人でいろんなところに遊びに行きたかったんだ。でも父さんは厳しくて、怖くて、なんか近寄れなかった・・・」

チェケラの目からは大粒の涙が流れていた。

館長の目からも涙が流れていた。そして笑顔でこう言った。

「また帰っておいで。いつでもいいから、待っているから」

そして列車の扉が閉まり、動き出した。

父親とゴシカの姿がどんどん小さくなっていく。

チェケラは涙を拭いて、一度深呼吸をした。

なぜか心は晴れやかであった。そして不思議なことに、ここに来てよかったと、自分の感想が180度変わっていることに、少し驚いたのであった。

第10章　会話とはなにか

・特別授業

クウは、友人のケーに誘われて、ケーが働く学校にやってきていた。

先日、ケーと会った時に、今度学校に遊びにおいでと誘われたのだ。ケーが言うには何やらクウに見せたいものがあるらしい。それは知らされないまま、まずはケーの言う通りに、学校にやってきた。

教室に到着すると、十人ほどの生徒に対し、ケーが授業を行っていた。

クウに気づくと、ケーは笑いながら、右腕を上げた。

「クウくん！来てくれたんだね。さあ、こっちへ」

そう言って手招きして、教壇の上に、クウを呼んだ。

クウは少し照れながらも、教壇に上がった。

「今日はみんなに特別ゲストをお呼びしたんだ。先生の友達で、クウくんだ。みんな、あいさつをして」

そうケーが言うと、生徒たちは、こんにちは、とクウにあいさつをした。クウも笑顔で、こんにちはとあいさつをした。

「ケーさん、お呼びいただいてありがとうございます。でもなんで今日、ぼくを呼んでもらったんです？」

クウは自分が呼ばれた理由を知らされていない。なぜ自分が学校に呼ばれたのか、不思議でしょうがなかった。

「実は今日、おもしろい授業をするんです。それをクウくんにもやってもらおうかなと思いまして」

「おもしろい授業？」

「ええ、まあ、見てもらった方が早いと思いますよ。それじゃあみんな準備して」

そう言うケーの掛け声に応じ、生徒たちはそれぞれ二人組を作った。10人生徒がいるため、5組のペアが出来上がった。

「それじゃあ、先攻の人から、よういー、はじめ」

ケーがそう号令をかけると、ペアのうち、一人がもう一人に話し始めた。五人が一斉に話し始めたので、最初は何を話しているのか、聞き取れなかった。ただ、だんだん聞いていくと、何やら、自分の要望を相手に伝えているらしかった。

「〇〇ちゃんのこういうところはいいところだと思うんだけど、ああいうところは直した方がいいと思うなあ」

とか、

「この前見た本がこう言う内容だったんだけど、僕はこう思ったんだ。〇〇ちゃんはどう思う？」

とか、

「お母さんにこんなこと言われたんだけど、僕はそうじゃないと思って、ケンカになったんだ」

など、最近あったことや、自分が思っていることについて、相手に話をしているようだ。

「ケーさん、これはなんなんです？普通におしゃべりをしているだけに見えますが？」

「ふふふ、そう思うでしょう。実はこれは対話の訓練なんです」

「対話の訓練？このおしゃべりがですか？」

そうです、とケーは答えてから、生徒に合図をした。

「よし、みんな。それじゃあ次は後攻の人、お願いします～」

そうケーが言うと、今度は話を聞いていた方が、反対に、今度は話し始めた。

「褒めてくれてありがとう。あと、私のよくないところだけど、確かにそう言うところもあると思う。でも私としてはね・・・」

と、先ほどの意見に対し、反論したり、本の感想を言っていた少年に対しては、

「私もその本は読んだわ。おもしろいよね。ただ、その中でこう言う場面があったと思うんだけど、私はそれにこう思ったのよね」

と、持論を展開したり、またお母さんとケンカしたという子のペアは、

「確かに、お母さんに急にそんなこと言われたらムカっとくるよね。でも、もしかしたら、お母さんって、こう言うことを心配したんじゃないかな」

など、これも相手の意見は聞きつつも、自分の意見を言っていた。クウには三組しか聞き取れなかったが、先攻と後攻の人の話をまとめると、以下のような会話がなされていた。

	先攻	後攻
１組目	〇〇ちゃんのこういうところはいいところだと思うんだけど、ああいうところは直した方がいいと思うなあ	褒めてくれてありがとう。あと、私のよくないところだけど、確かにそう言うところもあると思う。でも私としてはね・・・
２組目	この前見た本がこう言う内容だったんだけど、僕はこう思ったんだ。〇〇ちゃんはどう思う？	私もその本は読んだわ。おもしろいよね。ただ、その中でこう言う場面があったと思うんだけど、私はそれにこう思ったのよね
３組目	お母さんにこんなこと言われたんだけど、僕はそうじゃないと思って、ケンカになったんだ	確かに、お母さんに急にそんなこと言われたらムカっとくるよね。でも、もしかしたら、お母さんって、こう言うことを心配したんじゃないかな

ケーのクラスの生徒の、３ペアの会話

そこで、クウはある重大な特徴に気がついた。

・話す、そして聞く

それは、どのペアも、「ちゃんと会話をしている」と言うことだった。じつはこれは想像以上に難しいことに、クウは気づいていた。

クウが働くチョウリでも、家庭でもそうだが、なかなかこの"会話"ができているのは少ない。どうしても、自分の意見ばかりを言ってしまい、相手の話を聞くことは難しい。ついこないだも、クウは家庭で、子どもに対し、それはいけないと一方的に怒ってしまった。もしかしたら子どもにも子どもなりの言い分があったかもしれない。しかしその時のクウは、「それはいけないこと」と、一方的に会話をすることをシャットダウンしていたのだ。

また、チョウリで働いているとき、管理をしているチェケラに対し、自分の仕事ぶりを注意された時、クウは何も言わず黙って、その指摘を受け入れていた。これは会話にはなっていない。仕事だからという理由で、反論することを抑えるのは美徳とする風潮もあるが、最近それではいけないとクウは思って来ていた。もしできないのであればきちんとそれを相手に説明し、改善に繋げることが最も良い方法だと思っている。しかしなかなか今までの慣習で、そういった交渉というか会話をすることが、まだクウにとっては難しい行為であった。

しかし、この生徒たちは、その"会話"ができている。

自分の話を言い、それを相手が聞いて、自分なりの意見を返す。ものすごく基本なことなのに、案外それができている人が少ないことをクウは実体験から気づいていた。しかしこの生徒たちはそれをものの見事にマスターしている。クウは舌を巻いた。

「これが、ケーさんがぼくに見せたかったものなんですね・・・」

ケーはニッコリ笑って答えた。

「さすが、クウくん。気がついたようですね。僕が最後にクウくんに伝えたかったことはこれだったんです」

「えっ、最後って？」

クウは意味がわからず、ケーに聞いた。

「今日、無理を言って、クウくんに僕が働く学校に来てもらいました。ありがとうございます。最後に、この風景を見てもらいたかったんです。

僕は仕事の関係で、違う学校に異動することになったんです。今月一杯で、かなり遠いところへ異動になります。しばらくこちらには戻ってこれないでしょう」

「そんな・・・」

クウは心がどんどん萎んでいくのが自分でもわかった。

ケーはクウにとって大きな支えになっていた。もうケーと出会ってから何年も経っていたが、辛い時、悩んだ時はケーにいつも助けられていた。兄のように慕っていた。そんなケーが自分の近くからいなくなってしまう。強烈な寂しさに、クウは襲われた。

「僕が見せたかったもの、それはこの普通に"会話"をする風景です。大人もそうですが、どうしても自分の利益などを優先して、相手から利益を吸い取ってしまおう、自分だけ良ければいいという姿勢が見えるような気がしてなりません。

そうではなくて、自分の意見を言い、そして相手の意見を聞く。この基礎動作をもっと身につける必要があると思ったんです。

それを意識するようになって、この"折り合い"という訓練を授業の合間合間に入れるようにしたんです」

・自分と相手、半分半分

「”折り合い”？」

初めて聞く単語であった。いや、正確には「折り合いをつける」という言葉があるから初めて聞く言葉ではないのだが、その言葉だけを抽出して授業で取り扱うことなど、クウは全く理解できなかった。

「ええ、”折り合い”です。”折り合いをつける”ともいいますが、あれはどういう意味だと思いますか？」

クウは少し考えてから答えた。

「折り合いをつけるとは、相手と交渉した時に、落とし所をお互いつけて、納得することだと思います」

「その通りです。素晴らしい答えです。僕はその折り合いをつける技術を、生徒につけてもらおうと思ったんです。

”折り合い”は、やり方としては簡単です。まず先攻の人が自分の思ったことを自由に話をします。そしてもう一方の人がそれをまず聞きます。この際、茶々を入れたりせず、まずはじっと相手の話を聞いてもらいます。

その次に、後攻の人の番になったら、その聞いた話に対して、まずは受け止めます。この受け止めが重要なポイントです。」

「受け止めが重要なポイント・・・」

「そうです、話を聞いて、すぐに自分の意見を言うのではなく、相手の意見に対し、あなたはこう思ったんだね、とちゃんと認識したことを相手に伝えるのです。キャッチボールで言えば、相手からきた球をすぐに投げ返すのではなく、ちゃんと受け取ったよ、と相手に伝えるのです」

「それにどういう効果があるんですか」

まだ合点がいっていない様子で、クウは聞いた。

「人間は、自分の話を相手に聞いてもらいたい、受け入れてもらいたいと言う願望を、本能的に持っています。クウくんもそう思いませんか？自分の話はできるだけ、静かに聞いてもらいたくないですか？」

確かに、クウとしては、自分の話をまず否定せず、ちゃんと聞いてほしいと思った。

「確かに、そうですね。自分の意見はまず相手に聞いてもらえたら、嬉しいと思います」

「そうですよね。だから、まずちゃんとあなたの話を聞いてこう言うことだと理解したと相手に伝えるのがまずポイントです。

そこから相手に自分の意見を投げ返すのですが、ここでもポイントがあります。それは相手の話を否定したり、自分の意見を押し付けないと言うことです」

それはかなり難しそうだな、とクウは思った。どうしても人間、自分の考えと違う意見を言われると、つい反論したくなってしまう。そうしないと相手の言いなりになってしまうという防衛本能が働くのではないかと、クウは思った。

「なんだか、反論してはいけないと言うのは難しいですね。何かコツみたいなものはないんですか」

そのようにクウが聞くと、待ってましたとばかりに、ケーが答えた。

「それが”折り合い”という言葉の中に隠されているんです。ミドくん、折り紙を1枚持ってきてくれるかな」

そうケーが言うと、ミドと呼ばれた少年が、折り紙を1枚持ってきてくれた。

「ありがとう。

それではクウくん、この折り紙を1回折ってくれませんか」

「普通に折ればいいんですか」

そう言って、クウは折り紙を折った。正方形の折り紙で、自然と折った際、真ん中で折るようになり、ピタッと端と端でくっつくような形になった。

「これが何か・・・？」

「おじさん、折った紙を広げてごらんよ」

先ほどその折り紙を持ってきてくれたミドという少年が、クウに話しかけた。

言われた通りにクウは折り紙を広げると、真ん中に折れ線ができていた。その時はっと、クウは気がついた。中央の折れ線を中心に、紙が2等分されていたのだ。

「僕はね、クウくん。折り合いをつけるということは、その折り紙みたいに、折ると、正方形が半々になるでしょう。だから折り合いをつけるということは、自分の気持ちは半分にしなさいということなんじゃないかと思っているんだよね」

「自分の気持ちを半分に・・・」

「そう、自分が自分がと、がめつく気持ちではなく、相手と会話をしたり、交渉したり、折衝をするとき、つまり人と人とが触れ合う時、交わる時には、自分だけの気持ちを優先してもうまく行かない。折り紙だって、一人が1枚、もうひとりがもう1枚持っていたら計2枚になって、幅を取ってしまう。

しかし1枚の紙を折って半分にして、それをお互いつなぎ合えば1枚の広さで済む」

やっとケーの伝えたいことが、クウにわかってきた。相手と会話したり交渉したりする時は自分だけを満たそうとするのではなく、自分の要望は半分くらいに抑えて、相手のいうことを捉える。そして相手も自分の気持ちを半分くらい抑えて相手のことを考えると、コミュニケーションはうまくいくということを伝えたいのかもしれない。

しかし、その中でクウはある疑問を覚えたので、ケーに聞いてみた。

・相手と同じくらい自分も大事

「しかし、ケーさん。自分の気持ちを半分だけにとどめておくと、相手の話ばかりを聞くハメになってしまって、自分のやりたいことができないなどという事態になってはしまわないでしょうか」

その問いに、ケーより先に、ミドが答えてくれた。

「そこ、大事なところだよ、おじさん。半分にしなきゃいけないんじゃなくて、半分は言っていいんだよ。ゼロじゃなくていいんだよ」

ここでまたクウははっと気がつくことができた。そうか、相手の話を聞くという点に集中してしまうのではなく、相手が何を言ってこようとも、自分の意見を半分言う権利があるという事だ。

「そう、ミドくんが言ってくれたように、半分は言っていいんです。半分と聞いて少ないなと感じることもあると思いますが、相手を優先しすぎてしまう優しい人の多くは、相手の意見を聞くばかりで自分の意見をゼロにしてしまうことが多々あるんです。

そうではなくて、相手がどんなに貪欲に要望をしてこようとも、相手と自分は平等。つまり自分も同じくらい意見を言っていいと言うことなんです」

ケーがなぜ今日クウをこの教室に呼んでくれたのかがやっと理解でした。

これこそ、今、クウに必要なことだったのだ。つまり人と人とのコミュニケーションの部分だ。クウは優しすぎるがあまり、相手の言うことだけを聞いて自分のことは後回しにして、我慢をしてしまう性格だった。これはかなり精神的に負担がかかることだったが、どうしても性格上、クウはそれを直せずにいた。

ケーはそれに気がついていたのだ。そして自分がいなくなる前に、それを直す秘訣を最後にクウに伝えたかったのだ。もっと自分の意見は主張していい。それが会話であり、平等ということなんだと。

クウはこれまでケーから多くのことを学んできた。いやケーだけではない。ダーヨや、カナッサ、チェケラ、会社の社長。それにタール村の図書館の館長やゴシカなど、たくさんの人との会話からいくつものことを学ばせてもらった。

ここからはもうケーはいない。しかし、この最後の奥義のようなものを伝授してもらい、不思議とクウの心に不安はなかった。

ここからクウは何を学び、そしてどう生きていくのか。

まだクウの人生の旅路は、始まったばかりだ。

第1部　完